
悪魔倶楽部

星喰蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔倶楽部

【Nコード】

N5644X

【作者名】

星喰蛇

【あらすじ】

「相馬君。世界は今日滅びるわ」

クラスメートの詩織から告げられたその言葉から物語は始まった。現世と魔界をつなぐ扉が開く現象・“魔都生誕”の影響から奇跡的に生き延びた樹流徒（きりゅうと）は、事の真相を探るべく人々の骸が横たわる封鎖された都市で一人行動を開始した。行く先々で襲いかかる悪魔を倒し彼らを吸収することで次第に強さを増し能力を得る樹流徒。彼はひよんなことから悪魔が集う小さな酒場で情報を集めることになる。“天使の犬”と呼ばれる組織や謎の第三勢力も出現する中、地

上で暗躍する悪魔達は何か巨大な計画を進めていた。*あらすじを書き直しました。

本作をお読みになる前に（注意点・更新について）

注意点について

- ・この小説に登場する人物・土地・建造物・企業は実在するものと一切の関係がございません。
- ・この小説に登場する天使や悪魔などには作者によるオリジナル設定が追加されていますのでそういうのが嫌いな方はご注意ください。
- ・この小説には暴力描写が多分に含まれております。苦手な方はご注意ください。
- ・この小説には特定の宗教を賞賛したり逆に貶める意図は一切ございません。

更新について

- ・更新は不定期です。遅くなる場合はどれだけお待たせしてしまうか分かりません（作者のモチベーションの波が激しいため）。予めご了承ください。

その他

- ・本項の内容は予告無しに変更・追加・削除されることがあります。予めご了承ください。

少女の予言

「相馬君。ちよつといい？」

「え」

意外な人物から声をかけられ、普段表情の起伏に乏しい樹流徒は珍しく瞳を丸くした。

彼に話し掛けたのはクラスメートの伊佐木詩織。

樹流徒とは小・中・高とずっと同じ学校に通っていたため顔と名前くらいは知っていたが特に親しくも無い女子だった。

「僕に何か用事？」

樹流徒はそっけなく答える。実際は至って自然に喋っているのだが、彼のドライな口調と鋭い瞳が他人にはそっけない印象を与えるのだった。

だがそれは詩織にも共通している。彼女もまたどこか冷めた声色と視線をいつからか自然に有していた。

「今時間ある？少し話したいことがあるの。そんなに時間は取らせないから」

「いいよ」

樹流徒は躊躇うことも嫌な顔をすることも無く二つ返事で了承した。

彼はこれから真っ直ぐ自宅に帰るだけだったので特に断る理由も無かった。

「それじゃあ図書室へ行きましょう」

詩織は踵きむすを返す。長く美しい黒髪が翻った。空気を受けさらさらと流れる。

「待ってくれ」

「なに？」

樹流徒が呼び止めると詩織は体半分彼の方へ向ける。

「その話、ここで聞いたら駄目なのか？」

「ええ。できれば誰もいない所で聞いて貰いたい話だから」

「そう」

「迷惑？」

「別に」

「それじゃ先に行ってるから」

詩織はスタスタと教室を出てゆく。

廊下には部活・塾・家路を急ぐ生徒達が行き交っている。その波に紛れて消えた。

樹流徒は今すぐ彼女の後を追うことも出来たが、教室の中で数分潰してから出ることにした。

机の下に押し込んだばかりの椅子を引いて着席する。そして宙を見つめぼんやりと考えた。

伊佐木さんは一体何の話をする気だろう。

愛の告白という流れは期待できなかつた。これまで詩織との間に恋愛感情が芽生えそうな出来事は何一つ無かつたし、それ以前に彼女は恋愛そのものに余り興味がなさそうに見えるからである。

では何の話をするつもりなのか？彼は色々予測をしてみたが、そんな事を考えている間にそろそろ彼女に会いに行けば良いという結論に至った。

.....

図書室。

ここは普段昼休みなどに訪れると少人数の生徒を見かけるが放課後になれば無人の空間になる。

学校の近くに大きな図書館があるので需要はそちらへ移っていた。

樹流徒がそこに着くと詩織1人しかいなかった。彼女は椅子に腰掛けていたが彼が現れると立ち上がり

「相馬君。こつちへ」

本棚の裏へ隠れた。

余程他人にこの現場を見られたくないらしい。樹流徒にはそう見え
た。

彼が詩織の後を追うと彼女は正面を向いて立ち止まっていた。

2人のすぐ横には窓があつてそこから学校の裏庭とテニスコートが見渡せる。テニス部員が4名、早くも熱のこもった練習を始めている。

「来てくれてありがとう」

「いや。それで話つて?」

「少し唐突な話になるけれど」

「ああ」

「相馬君は世界が滅びるのっていつだと思つ?」

「え」

果たして詩織が持ち出してきた話は樹流徒が教室で数分間の内にあれこれ予想してきたもの全てから遠く外れたものであった。

色っぽい話になる可能性は薄いと思つていたが、まさかこのような

質問が飛び出すとは流石に予想していなかった。
しかしだからといって黙っているわけにもゆかず

「世界が滅びる日か。僕には見当もつかないな。2012年説も信じてないし」

「そう。それじゃもう1つ。もし今日世界が滅びるとしたらどうする？」

「どこかで聞いたような質問だな」

「真剣に考えてね。哲学ゴッコをするために来てもらったわけじゃないんだから」

「なら何のためにこんな質問をするんだ？それも僕に」

「そうね。当然そう思うわよね。ごめんなさい、私の話す順番が悪かったみたい」

「というと？」

「先にこれを言っておかなくてはいけなかったの。相馬君……」

……世界は今日滅びるわ。

「……」

樹流徒は反応に窮した。

“今日世界が滅びる”。それがもし詩織なりのジョークなのだとしても良かった。だが彼女の目は真剣そのものだ。冗談を言っている訳ではなさそうだしどうも茶化して終いに出来そうな雰囲気ではない。

結果彼は、相手が真剣に話をしている以上こちらもなるべく真面目な態度で応じるのがベターではないか……と考えた。

「今日世界が滅びると言ってもその根拠は？」

「科学的根拠は無いわ」

「だろうな。あつたら大変だ」
「そうね」

詩織は微かに^{まぶた}瞼を下ろし視線を逸らす。物憂げな表情をする。

数秒の沈黙の後、樹流徒が口を開く。

「伊佐木さんは何故今日世界が滅亡すると考えたんだ？」

「でも、リアリストや学者を納得させられるような説明はできないわよ」

「それはもう分かった。別に何でも良い。例えば君の勘だとか。それとも君の願望だとか」

「実は私、未来を予知できるの」
「なるほど」

樹流徒は取りあえずそう答えるので精一杯であった。
しかしすぐに別の言葉を探して切り返す。

「もし君が未来予知を出来ると主張するなら今度はその根拠を提示しないと」

「残念だけれど私の予知能力は規模の大きな出来事しか見ることができないの」

「え。それはどういう意味？」

「今のところ世界滅亡以外の出来事は何も見えないということよ」
「そうか。それなら仕方ないな」

樹流徒は視線を窓の向こうに移した。いつの間にかテニスコートの周りにいる部員の数は一〇名くらいに増えている。

「もういいわ。こんなところに呼び出した上に変な話をしてごめん

なさい」

詩織は特に失望した様子も無く淡々と謝る。

「いや別に。それに悪魔の証明という言葉もあるし」

「そう言ってももらえるのは嬉しいけれど。でもアナタ私の話を信じないでしょう？」

「完全に否定したりはしないよ。それより聞きたいことがある」

「何故この話をしたのがアナタなのか……でしょう？」

「そう。何故僕に？」

「それは話すと長くなりそうだからやめておくわ」

「そうなんだ」

「ええ。そうなの」

詩織は白く長い指をそつと伸ばして窓を少しだけ開いた。隙間からふわりと柔らかい風が入り彼女の前髪を揺らす。

「ね。相馬君。中学生の時のことまだ覚えてる？」

「中学の？」

「ええ。あの日私達が巻き込まれた“事件”のこと」

「ああ、あれか」

樹流徒には彼女が口にした“その事件”に心当たりがあった。

「また唐突な話を持ち出したものだな。だが忘れるわけが無い」

名も無き事件

樹流徒と詩織は中学時代に1度だけ同じクラスになったことがある。

そしてその年、彼らの学校でとある不思議な出来事が起きた。

5月の大型連休明け初日。空は晴れ渡り真っ白な雲が気持ち良さそうに泳ぐとても穏やかな天気だった。多くの生徒達が眠気を誘われ学校中が軽い倦怠感に包まれていた。

その日、午前中最後の授業に音楽を控えていた樹流徒たちのクラスは音楽室に移動していた。音楽室は校舎3階に位置しておりその前を走る廊下は当然ながら外壁や天井に囲まれている。普段生徒達が危険に晒される事などあり得ない場所だ。

だが、そのあり得ないことが起きてしまった。

どこからともなく現れた黄金色に輝く巨大な発光体が窓と壁をすり抜け、偶然廊下を歩いていた生徒達に直撃したのである。

それにより4名が意識不明となり病院へ搬送されたが、幸いその日の内に全員が意識を回復。後に受けた精密検査でも各部異常は見られなかった。

この不思議な事件は当日の全国ニュースで取り上げられた。学校には地元マスコミが取材に訪れた。

しかし日々大量の情報を消費するのが現代社会である。2日も経てば世間はこの事件のことなどほとんど忘れ去り、より鮮度の高いセンセーショナルな出来事を追い求めていた。事件の舞台となった校

内ですら1週間も経てば誰もそのことを口にしなくなっていた。一連の様子を映した画像でも存在していれば話は別だったかもしれないが、そういった物証が全くないので仕方がなかったかも知れない。

結局この一件は“窓の外で何かが激しいフラッシュを起こし、たまたまそれを見てしまった生徒達が気絶した事件”として片付けられたのである。

ちなみにそのフラッシュの正体がなんであったのかという議論はなされなかった。議論の結果答えを得たところでそれが正しいかどうか分からないからだ。

今やこの名も無き事件に関する事実を正確に知っているのは被害者の4名と当時その付近にいたごく少数の生徒のみ。

そして……その被害者の中に樹流徒と詩織の2人が含まれていたのであった。

当時の回想を終えて、樹流徒は懐かしさに表情を緩めた。

「あれは本当に驚いたな。お互い生きていて良かった」

「そうね」

「でも何故、突然今そんな話を？」

「ううん。別に。ただなんとなく」

「そうか？もしかして伊佐木さんが僕をここに呼んだ理由と関係があるんじゃないかと思ったんだが」

樹流徒がそう言うと、彼女は答えず、代わりに

「話を聞いてくれてありがとう。相馬君で想像してたより話し易い人ね」

そう言つて微笑した。

「それじゃあさよなら」

彼女はそのまま背を向け歩き出す。

さよなら……か。

樹流徒は本棚から適当な本を手に取り真ん中辺りのページを適当に開いた。5ページほど読み進めると本を元の位置に戻して図書室を後にした。

メイジ

樹流徒が改めて帰宅をするため荷物を取りに教室へ戻ると、そこに詩織の姿はもう無かった。帰ったのかも知れない。

代わりに、彼の机の上に尻を預けて突っ立っている男子生徒がいた。このクラスの生徒ではない。

黒い髪が毬栗いぐりの如く天を突き明らかに何かしらの手段でカチコチに固めている事が分かる。肩をダラリと下げポケットに両手を突っ込んでなにやらぶつぶつと独り言を唱えている。傍目には少しばかり近寄り難い青年だ。

樹流徒は青年をよく知っていた。恐らく学校中の誰よりも良く知っていた。彼の名はメイジ。樹流徒の親友である。

メイジというのは彼の本名ではなく愛称で、漢字を当てると明治と書き、本当は“あきはる”と読む。彼の身近にいる人々は、大半が彼のことを本名ではなく愛称で呼んでいる。樹流徒もその内の一人だった。

メイジは樹流徒が近付いて来るのに気が付くとニヤリとした。机から尻を離しポケットから手を出す。両腕を肩と同じようにダラリと下げた。気合の入った頭髪とは裏腹になんだか大儀そうだが、決して体調が悪いのではない。これが普段通りの彼なのであった。

現在の姿からは余り想像できないが、メイジは元々無駄に明るくて活発な少年だった。春が来れば新しいクラスメートたちに笑いを振り撒き、夏には蜂の巣を棒で突付いて大怪我をし、秋は誰よりも

運動会を楽しみにし、冬でも毎日短パンを穿いて外を駆け回る、元氣・やんちゃという言葉に服を着せたような少年だった。昔から仲が良かった樹流徒はいつも彼に振り回されていた。

だが中学の卒業を目前に控えた頃、メイジの様子は徐々に変わり始めた。少しずつ口数が減り笑顔も減っていった。樹流徒は何かあったのかそれとなく尋ねてみたが、本人は特別な出来事があった訳ではないと言う。だからそれ以上の追求はしなかった。10代半ばの青少年が性格や雰囲気を一変させるのは特段珍しいことではない。メイジもその一例に過ぎないと樹流徒は考えるようにした。

「よう樹流徒。随分長いトイレだったな」

メイジは片手を上げ挨拶をする。その手は伸びきらず重力に負けてすぐに下がった。

「トイレじゃない」

「まあどうでもいいや。それより今日は一緒に下校な。拒否権とかねーから」

「別に拒否なんてしない。何せ2人で歩くのも今日で最後になるかも知れないからな」

「あ？最後つてなんだよ？遠まわしな絶交宣言？それともオマエ転校すんの？」

「違う。もし今日世界が滅んだらそうなるって話だ」

「何だそれ？オマエが冗談言うの珍しいよな。特に面白くもねエのが残念だが」

メイジは頭を傾倒させ中指で首筋を搔く。

「うるさいな。早く帰ろう」

彼らは揃って教室から出ていった。

異変

ここは地方の都市・龍城寺市。

元々広い土地を持つ市だったが数年前に隣接する市と合併したことにより現在では全国屈指の面積を有する。市内の真ん中に建つ龍城寺駅周辺を中心にIT・商業・金融関係のビルが多く立ち並び、一方で郊外には古い町並みを残している所や野生動物が生息する緑豊かな地域もある。

樹流徒はこの都市の近郊に住んでいた。とにかく人が多く、外は朝から夕方にかけて学生とスーツ姿のビジネススマンでごった返している。発展に成功し活気溢れる地域と言えるが、どこかせわしない地域とも言えた。夜になると案外静かだがそれでも少し前まで昼夜問わず狂ったように明かりがついていた。現在は色々と事情があつて多少落ち着いた雰囲気になっている。

校門を通り過ぎた樹流徒とメイジは、すぐ目の前を走る大通りを行く。この時刻、車道では車が数珠繋ぎになりガードレールに隔てられた両側の歩道は通行人で溢れかえっていた。

周りは建物だらけ。ビルの外壁に取り付けられたディスプレイには広告が映し出され別の建物には消費者金融関係の会社の看板が3つも4つもくっついている。地元の間人にとっては見慣れた景色であるが、樹流徒はこの町並みが少なくとも美しいと思つたことは無かつた。

2人の自宅は大体同じ方向にある。そのため途中まで一緒に帰る

ことができた。

彼らは横並びで歩きながら他愛も無い話をする。ネットの話題、服スポーツ、漫画やゲーム、映画、そして時々恋や政治や勉強の話……本当に他愛も無い会話ばかりであった。

今日は一段と話が盛り上がって、気付けばいつの間にか大分歩いていた。ここで彼らはある十字交差点に差し掛かる。運悪く変わつたばかりの赤信号に捕まった。メイジは眉根を寄せる。

「ここの信号待ちキツイよな。この前時間測ってみたら2分53秒だったぜ。長すぎだろ」

「3分も待つのか」

「オイ、人の話聞いてたのかよ？2分53秒だったの」「同じだろ」

「樹流徒よオ。オマエ7秒あったら何が出来ると思ってんだ？」

「洗濯物のシャツ1枚たたむくらいはできそうだな」

「分かってねエな。7秒つつたら俺が愛してやまない曲のイントロ部分が丁度聴ける時間なんだよ」

「そうか。知らんが」

「大体オマエは何も分かってねエよ。本当のオレを何も知らねエ。

まあ……オレが隠してるってのもあるが」

「なんだよいきなり？」

信号待ちをしている行人たちの中から小さな笑い声、携帯電話のボタンを素早く打つ音、ヘッドフォンから漏れる音がしている。目の前を車が過ぎるたびにその音は途切れ、また聞こえる。

「ヘイ、樹流徒」

「何だ？」

「空に浮いてる模様、なんかカツコイイよな」

と、メイジ。いきなり何を言出したのか樹流徒には良く分からなかった。しかし彼が多少風変わりな言動をするのは今に始まったことではないので特別気にもならない。

「模様？雲のことか？」

樹流徒は正面遠くの空を眺める。だが別に面白い形をした雲は見つからない。あとは夕空が広がるばかりだった。

別に何も無いみたいだが。樹流徒は言おうとしてメイジの横顔を見る。すると彼の視線は天に向かい垂直に延びていた。それで樹流徒も彼を真似て同じ方角へ視線を送る。

樹流徒は……目を疑った。かつてこれほどまでに自分の目を疑った事は無かった。

遙か上空に、紫色の光で描かれた奇妙な紋様が浮かび上がっているのだ。かなり鮮明に見える。

直径20センチ程度の円に、三角形と逆三角形を重ねたいわゆる六芒星が描かれている。その他にも見知らぬ文字が全体に散りばめられている。地上からこれだけの大きさで見えるならば実際はかなり大きさに違いない。

「もしかするとUFO？」

樹流徒は少なからず興奮した。声の大きさも普段の3割り増しくらいになった。対してメイジはとても落ち着いている。

「知らね。でも少しずつデカくなってねエかアレ？」

「本当か？」

樹流徒は空に浮かぶ紋様の大きさに注目する。

すると確かにメイジの言う通り、それは僅かずつではあるが確実に広がっていた。

信号の色が切り替わる。

しかしその場に立ち止まったままジッと空を見上げる2人はその場を動かない。

そんな彼らの姿を見た別の通行人もまた何事かと思いい立ち止まって空を見上げ、それによって更に立ち止まる人が増えてゆく。

いつの間にか大勢の人々が上を見上げていた。辺りにはわかにか騒がしくなり、携帯電話のシャッター音やムービー撮影の操作音が増えてゆく中、謎の紋様はますます大きくなってゆく。

そして円の直径が大体1メートルくらいにまで達した時、樹流徒を含めた多くの見物人達はある事に気付き始めていた。

――あの紋様、大きくなっているというより地上に近付いているんじゃないか？

その認識が正しいかどうかは誰にも分からなかった。近付いていると錯覚するくらい大きく広がっているだけなのかも知れない。しかし異常事態であることには変わりなかった。

「何あれ？絶対映画の撮影とかじゃないよね？」

「ああ。これ今年の人類滅亡説来ちゃったりして」

どこかの若い男女が冗談っぽい口調で言葉を交わす。その会話が耳に入って、ふと樹流徒の脳裏に、先程図書室で詩織から聞いた話が浮かんだ。

世界滅亡？まさかそんなことが本当にあるわけない。偶然が重なる

っただけだ。

彼は内心で否定したが、謎の紋様はやはり地上に迫っている様に見える。不吉な予感が拭えない。

そんな彼の横でメイジは薄い笑みを浮かべている。その瞳は密かにキラキラしていた。

そして…… 2012年11月26日午後4時09分

龍城寺市の上空を多い尽くすまでに広がった謎の紋様から突如降り注いだ黒い光が人々を飲み込んだ。

目を覚ますと

熱い！

背中が焼けるように熱い。

樹流徒はその痛みで目を覚ました。左の肩甲骨辺りが何故だかチリチリする。怪我を負ったのかもしれない。

だが瞳を開いた瞬間飛び込んできた景色がその痛みを忘れさせた。

視界いっぱい広がったのは一面黒っぽい水色に染まった空。宵とも明け方とも違う、見たこともない不思議な色をしている。

それに太陽、月、星、それに雲から鳥まで、本来そこに何かしらあるべきものが一切見当たらない。

樹流徒は仰向けに倒れていた。頭や背中にはゴツゴツした感触がある。すぐにアスファルトの上であることに気付く。辺りは静寂に包まれている。人の話し声も地面を擦るタイヤの音も聞こえない。

これは一体どういう状況なのか？記憶を辿る。

メイジと一緒に下校している最中、上空に謎の紋様が現れて辺り一帯が黒い光に飲みこまれた。そこまでは覚えている。だがそれより先の記憶が無い。光を浴びた時点で意識が途絶えたのかも知れない。

樹流徒はようやくよく上体を起こす。

するとそこには、たったいま目にした光景よりも更に信じ難い光景が広がっていた。

人々が道路の上に横たわっている。それが視界の届く範囲までずっ

と続いていた。皆生きているのか死んでいるのか分からない。ただ動いている人が誰もいない。

車道の中も滅茶苦茶だ。あちこちで車が衝突している。トラックの後部に突っ込んだ軽自動車ボンネットを開きフロントガラスに蜘蛛の巣状のヒビを入れている。ガードレールの無いところから歩道に飛び出した車が店のショーウィンドウに突っ込んでいる。ドライバーたちは皆車の中で意識を失ったままだ。

そして遠くのビルからは火の手が上がり黒い煙がもうもうと立ち昇っていた。その更に向こうは何故か濃い霧に覆われている。気味の悪い紫がかつた霧だ。良く見れば遠方の空は全てその霧に包まれていた。それによってここら一帯の上空にだけぼっかりと穴が開いた怪異な現象が起こっていることに、今気付く。

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。それこそ本当に詩織が言っていた世界の終わりが来てしまったのではないかと思わせる、全く生の存在を感じさせない、悪い冗談みたいな景色だ。せわしなくも平和だった街の面影は無い。

彼はこの変わり果てた街の様子を前にして少しの間ぼんやりしていたが、やがてはっとした。

そういえばメイジは？アイツは無事か？

すぐ隣を見る。しかしそこに彼の姿はない。

もしかするとアイツは僕より先に目が覚めたのかもしれない。樹流徒はそう考えることにした。

その場で立ち上がる。全身に痛みはないがまだ背中に焼けるような痛みを感じた。制服の上着を脱いで手を伸ばし指先で痛む部位に触れてみる。肌は滑らかなままで少なくとも酷い外傷を負った様子は無い。ひとまず安心した。特に我慢できないほどの痛みでもない

ので歩くだけなら全く支障は無い。その内にこの痛みも引くだろうと決め付ける。

樹流徒は歩き出した。目の前で倒れている人に近付き声をかける。だがそのサラリーマン風の男は意識が無かった。胸が上下しておらず呼吸をしていないように見えた。口元に耳を近づけてみると実際息をしていない。

携帯電話を取り出す。モニターを見ると時刻は午後6時半。メイジと一緒に学校を出てから2時間以上経っている。続いて119番と110番を押してみる。しかしいずれも繋がらない。そこで最後の手段として、うる覚えの応急手当を施してみる。だがそれも虚しく効果は無い。そもそも“急に応じる”と書いて応急だ。2時間以上も経った今では無意味に等しい。

「誰か生きてる人はいないか？生きているなら返事をしろ！誰か！起きろ！」

生まれて初めてというくらい大きな声を張り上げた。しかしその声は余りにも虚しくビルの隙間に消えてゆく。日常における無力感などとは比較にならない圧倒的な虚無感がそこにあつた。

彼は取りあえずこの場から移動する事にした。家族の安否を確認するため自宅へと向かう。自宅まではまだ多少距離が残っている。走っても10分はかかりそうだが、人を踏まぬよう気をつけて歩かなくてはならないことを考えると、もう少しかかる。

……

先へ進んでも視界に映るのは道に横たわる人々ばかりだった。自動ドアやガラス戸を通して建物内で倒れている人たちの姿も見える。

また、被害に遭ったのは人間ばかりではなかった。犬も猫も倒れているし普段は電線の上から人々を見下ろしているカラスたちも地面に落下している。

その一方で建物などには特に何の影響も見られない。車に突っ込まれて損傷した建物などはあるが、空から降り注いだ謎の光により直接破壊された物はない。

実に不思議な光景だが、樹流徒はこれとよく似た現象を知っていた。今一度、中学時代に巻き込まれた事件を思い出した。

謎の男

自動車は一方通行しか許されていない狭い道が、少し複雑に入り組んでいる。

ここはとある住宅街。一軒家が多く立ち並んでいる。その中には樹流徒の実家もあった。もう目と鼻の先にある。

彼は、恐らく自分の家族も黒い光の影響を受けているだろうと考えていた。助かっていると信じたのが街の様子を見る限りそれも都合が良すぎるように思える。ただみんなの容態がどうなっているかまでは分からない。自分のように気絶しているだけかもしれない。希望は残されていた。家に近づくにつれ足取りは速くなる。

と、その時。

道路の真ん中に人が突っ立っている。目を覚ましてから初めて動いている人を発見した。樹流徒はちよつとした安堵を覚えて自然と表情が緩んだ。

その人物はYシャツとネクタイにベストを身に着けた30歳前後の男だった。スラリとした体型をしており、一見どこにでもいそうだが手入れの行き届いた小綺麗な顔をしている。

男はこの状況に呆然と立ち尽くしているのかと思つたら、逆にどこか落ち着いた様子だ。そして樹流徒を待ち構え行く手を阻むかのよう立っている。

2人が向かい合うと、男は目を丸くした。

「わ。こりゃ驚いた。あの光を浴びて生きてる人がいたなんてね」
軽い口調でそのような事を言う。

「すみません。急いでいるのでどいてもらえますか？」

「そんな急いでどこ行くんだい？青年」

「自宅です。家族の安否を確認しに」

「ほう。そりゃ健気だね。でも君には気の毒だけど多分ご家族は亡くなってるよ」

男は不吉なことをサラリと言った。

「なぜ死んでいるとわかるんです？」

樹流徒は微妙に眉を寄せる。

「ああ……ゴメン。ちよつとストレートに言い過ぎたね。謝るよ」とすると男は小さく頭を下げてから

「でも、僕から言わせたら君が生きてる事の方がよっぽど“なぜ？”

”なんだケドなあ。良く生きてたね」

そう言っつて首をかしげる。

「まるであの黒い光の正体を知っているみたいな口ぶりですね」

「え？ああ……うん」

「もしかしてアナタは何か知っているんですか？」

「ん……まあね。つて言っても肝心な部分については良くわからないんだけどさ」

男は少なからず何かを知っているらしい。それをあっさり認めた。

「ならアナタが知っていることだけでいいので教えてもらえませんか？」

「別にそりゃ構わないけどさ。多分話しても信じてもらえないよ？なんせ非常識でブツ飛んだ話だからね」

微笑する。

「既に現状が非常識ですから」

「うん、まあそうかもね。じゃ教えてあげよう。でもそれならどつ

かのお店に移動しない？今なら食い逃げし放題だしさ」

「本気で言ってるんですか？」

樹流徒は呆れた目で男を見る。

「あゝ冗談よジョーダン。君ってばあんまジョーク通じないタイプ？」

「冗談でも言つて良いことと悪い事があるでしょう」

「ゴメンゴメン。君の言う通りだ。悪かった。それじゃ公園いこうか。あそこの水道水ならいくら飲んでも問題ないしね」

「……」

樹流徒は男を訝しげに思う。しかし情報を得るため彼についてゆくことにした。

家族の安否は気になるが、この街に一体何が起こったのかも同じくらいに気になる。それだけ情報が無いというのは不安だった。

すぐ近くの公園へ移動を始める。

魔都生誕

移動中

「いやあ酷い有様だね。まさにこの世の終わりってカンジ？」

男は辺りを見回しながら平然と語る。非常にさばさばした態度だ。不謹慎に見えなくもないが、明確な悪意が感じられるわけではない。いずれにせよ樹流徒はこの男をいちいち咎めるような心持ちではなかった。

「みんな死んでしまってるんですか？」

樹流徒はあえて言葉を選ばず直接的な表現で尋ねる。

「そのハズなんだけどさ。君が生きてるんだから他にも生存者いるかもね」

「そう言うアナタはなぜ無事なんです？あの光を浴びなかったんですか？」

「それは秘密。ところで君、本当に普通の人間だよな？」

「どういう意味です？」

「いや別に。特に深い意味は無いんだ、うん」

男は取り繕うように微笑した。

約5分後。

2人は市営の公園に到着した。数本の外灯、時計、水道、それに公衆トイレとベンチが設置されている。あとは適当に刈り揃えられた芝生と濁った池があるだけのただっ広い場所だ。

普段は市民にとって憩いの場となっているこの空間も現在は異様か

つ殺伐とした光景を晒している。犬のリードを握ったまま倒れている老人や、池に架かった橋の手すりにもたれかかったまま動かない青年などの姿が見える。

「ベンチに座ろうか。あの辺には誰も倒れてないしね」

男の提案で公園の一角に置かれたベンチに向かう。空よりも少し鮮やかな水色のベンチには大人3人が余裕を持って座れるくらいのスペースがある。

彼はベンチに腰掛け、樹流徒はその斜め向かいに立った。

「君も座つたら？」

男は掌でベンチを軽く2度叩く。

「結構です。それより話を聞かせて下さい」

「はは。つれないなあ。……で、何を話すんだっけ？」

「僕達を襲った黒い光の正体についてです」

「うん。そうだった。でもそれを説明するには先に話しておかないといけないことがあるんだ」

「なんです？」

「まずはじめにね。今回の一件は“悪魔”の仕業なんだよ」

「え」

男の口から悪魔という予想だにしない単語が飛び出して、樹流徒はまともに返事をする事が出来なかった。そしてすぐに小馬鹿にされたような気分になる。そのくらい突飛な展開だった。

「驚いた？君はモチロン悪魔を知ってるよね？天使と悪魔の悪魔だよ」

「知ってますけど空想の産物ですから」

「いやそれが実在しちゃうんだな。信じられないだろうけどさ」

男はそう答えてから

「ところで、君もあの巨大な“魔方陣”は見ただろ？」
まだ得心がいかない樹流徒を半ば無視する形で話を先へ進める。

「魔方陣って、もしかして上空に現れた変な紋様のことですか？」
「そう。ご名答。あれは俺らの住む現世と悪魔たちが住む魔界とを繋ぐ扉なんだよ」

「現世と魔界を繋ぐ扉……」

樹流徒は小首をかしげる。正直このテの話にはついてゆく自信が無かった。公園に来る前「常識でブツ飛んだ話になる」と前置きはされていたが、些か予想の範疇はんちゆうを超えていた。

「悪魔がムリヤリ俺らの世界に大穴を開けて通路を作ったってわけだね。ホント迷惑な話だと思わないかい？」

「信じ難い話ですが……悪魔と魔法陣は分かりました。けど、結局あの黒い光は何だったんですか？」

「それは今から説明しようと思ってたところだよ。あの光はね、2つの世界が繋がった瞬間の衝撃によって発生した現象なんだ。霊的な現象に近いのかな」

「そもそも霊的な現象と言われてもピンとこないです」

「うん。まあそれがフツの反応だよ。でもそうとしか説明のしようが無いんだ」

「はぁ……」

「信じるとは言わない。でもとりあえず今は非科学ありきで話をさせてもらうよ。そうしないと何も言うこと無くなっちゃうからね」
「分かりました」

樹流徒は、納得はできないが首を縦に振った。

「さて。あの光は本来普通の人間が耐えられるようなものじゃないんだ。だが君だけは何故かこうして生きている。これは一体どういう事なんだろうね？」

「それは僕が聞きたいです」

「君自身に心当たりは無い？」

「ええ」

樹流徒は首肯する。本当に心当たりなどなかった。男はなるほどねと呟きながら2、3回小さく頷く。

「ちなみに俺は今回の現象を“魔都生誕”と名付けた」

「マトセいたん？」

「そう。この都市は魔界と繋がっちゃったわけだからね。魔都と呼ぶにふさわしいでしょ。今日はその魔都が生まれた日。誕生日というわけだ」

「……」

今回の事変を引き起こしたという悪魔。その悪魔が住むという魔界。現世と魔界を繋ぐ扉・魔法陣。そして魔都生誕。もう滅茶苦茶だった。樹流徒は自分の中で現実や常識という概念が儚くも崩れてゆく音を確かに聞いた。

封鎖

「さて。これで君の知りたがってた黒い光の正体に関しては説明終了したんだけど……まだ何か質問があったら言ってもいいよ」と、男。樹流徒は遠慮なくそうさせてもらうことにした。今すぐ思いつくだけでも他に聞きたいことは残っている。

「今までの話が仮に本当だとして、それを知るアナタは一体何者なんでしょうか？」

「ああやっぱ気になっちゃう？でもゴメン。それ秘密なんだ」

「なぜ秘密なんです？」

「うん。それも秘密」

男は自分の素性を明かすつもりは無いらしい。樹流徒はそれを察して早々に質問を変えることにした。

「それじゃあ悪魔は何のために世界を繋いだんですか？」

「うん。イイ質問だ。実は俺もそれを調べてるんだよ」

「え。なぜ？」

「ゴメン。それもナイシヨ」

「はあ……」

樹流徒は少し顎を上げ視線を遠くの空へと移した。そこにはまだ紫色の厚い霧がかかり向こう側の景色を覆い隠している。

水色の空と紫色の霧。大地に横たわる人や生き物たち。改めて見ると、男の話が根拠も無く信憑性を帯びてしまうほどの光景であった。

「被害は一体どこまで広がったんでしょうね？」

「どつだろつね。魔方陣が広がった範囲までだけだと思っけど、実際どうなってるか確かめようが無いからね」

「どうして確かめようが無いんです？被害が及んでいない場所まで脱出すれば良いだけなんじゃないですか？」

樹流徒が疑問を呈すると

「いやそれがさ。この市内、封鎖されちゃってるみたいなんだよね。男は頭の後ろを掻きながら「参ったね」と笑う。だが樹流徒にとつては全然笑い事ではなかった。むしろ目耳に水である。

「封鎖？一体誰がそんなことを？国……自衛隊ですか？」

「いやいや。誰って言うより……遠くに紫色の霧が見えるだろう？」

「ええ」

「あの霧に隠れちゃってここからだとは分からないんだけどさ。もの凄くデカイ壁がこの市内をぐるっと囲っちゃってるみたいなんだよ」

「デカイ壁って……何なんですかそれ？」

「“結界”っていうんだけどね。生物や被造物はあの壁を通り抜ることができないのさ」

「その結界とかいうのも悪魔の仕業だと言っんですか？」

「うん。間違いないんじゃない？ホント困っちゃったね。ハハハ」

「何がそんなに面白いんです？」

流徒はついにカチンと来て男を睨む。多少焦っているせいもあった。

「悪い悪い。君を少しリラックスさせてあげようと思ってさ」

男は少しだけ真面目な顔を作って謝り

「さて。よく考えたら俺が君に教えてあげられそうなコトもう無さそうだからさ。そろそろ行くね」

ベンチから立ち上がる。

「あ………そうですか。ありがとうございました」

「いって、いって」

樹流徒が小さく頭を下げると、男は手をぶらぶらと左右に振って応える。それから片手でネクタイの位置を直すと「じゃあね」と明るい声を発して歩き出した。

が、たった数歩進んだところで立ち止まる。

「そうそう。さっきの質問だけど一部だけ答えるよ」

そう言いながら樹流徒の方に向き直った。

「なんです？」

「俺が何者かって話。俺の名前は南方万^{みなかたよす}。それだけ。あとは秘密」

「僕は相馬樹流徒です」

「ふうん、キルト君か。覚えとくよ。縁があつたらまた会えるかもね。案外仕事の最中に出くわしちやったりして」

「え。仕事って？」

「おっと、口が滑った。こりゃマズい。そんじゃ今度こそさよなら」

南方と名乗る男は足早に去ってゆく。

樹流徒はその後を追うべきか一瞬迷ったが、早く家族の安否を確かめたい事もあつてそのまま彼の背中を見送った。

絶望の中で

再び1人になった樹流徒は南方と出会った場所まで引き返し、そのまま自宅に到着した。道中で他の生存者と出会うことを期待したがそれは叶わなかった。

相馬家は白い外壁と紺色の陸屋根が特徴のデザイン住宅。間取りは4LDK。主寝室とガラス戸1枚を隔てて小さなバルコニーがある。庭の敷地は車2台分のガレージが大半を占拠し、隅には家庭菜園用の狭小な花壇が設けられている。

樹流徒は玄関ドアの前に立つ。ひとつ息を吐いてからノブに手をかけた。普段彼が学校から帰宅してくると鍵は開いているが、今日も例に漏れずノブは抵抗無く回る。

中は物音ひとつなかった。人の気配が全く感じられない。静寂に压倒される。

眼下には見慣れた靴が並んでいた。弟のスニーカーが雑に脱ぎ散らかされ、妹の靴はきちんと踵を揃えて置かれている。秋になってから母が毎日履いているローヒールパンプスもあった。

彼は固唾を飲み、家にかかる。床は硬く冷たい。突き当たりに見えるドアがやけに遠く感じた。

それからしばらくして玄関の扉が勢い良く開いた。すぐに激しい

音と共に閉じられる。

家の中から飛び出てきた樹流徒の顔は少し青ざめていた。呼吸もわずかに速い。

彼は家族たちとの対面を果たした。しかし息をしている者は誰もいなかった。皆ぞつとするほど青白い姿に変わり果てていた。

母は台所の食器棚付近で倒れ、その傍には床に落下した平皿の破片が飛び散っていた。弟と妹は2階の一室で重なるように倒れていた。ビデオゲームで遊んでる最中だったようである。

樹流徒は視線を落とす。一瞬、地面の形が歪む幻覚に襲われた。玄関の扉に背を引きずりながら座り込む。頭を抱え両手で前髪をくしゃりと握り締める。

現実を受け止めるのには少し時間が必要だった。もちろんこの結果を予想していなかったわけではない。だが人間は何でもかんでもそう簡単に割り切れる生き物ではなかった。

やがて彼は立ち上がりおぼつかない足取りで歩き出した。行くあてなどない。ただとにかくこの場から離れたかった。

.....

自分が今どこにいるのか良く分からない。歩き始めてから何分経ったのかも良く分からない。しばらくの間そんな状態で彷徨っていた樹流徒はようやく落ち着きを取り戻し始めた。

途端に喉の渇きと足の疲労を思い出し、すぐ目の前に建つマンションの階段に腰を下す。そしてぼんやりと空を見上げる。

あれから上空の様子は全く変化が無い。黒っぽい水色を保ち続け
幻想的な光を地上に注いでいる。そのため今が何時なのか見当が
つかなかった。

前屈みになつて首を垂れると壁際に小さな羽虫が1匹転がっている。
微動だにしない。ほぼ静止した世界だ。乾いた風に揺れる草木と瞼まぶた
にかかった前髪の端だけがかるうじて視界の中で動いている。

一息つき、樹流徒はこれからのことを考えることにした。今後自
分がどう行動すべきなのかを模索する。

決して健全な意味で前向きになつたわけではなかった。何も考えず
にいると先程見てきた嫌な光景が脳裏に浮かんでくる。だから頭を
働かせずにはいられない。ただそれだけだった。

それでも今後を真剣に考えることには違いない。色々と思案して
みた結果、彼の中で4つの選択肢が浮かんだ。

1つは大人しくどこかに待機して外部からの救援を信じて待つこと。
1つは自分以外の生き残りを探して歩き回る事。
1つは被害が及んでいない土地への脱出。ただし南方によればこの
土地は封鎖されているらしい。それが事実ならば脱出は不可能かも
しれない。

そして最後の1つは、この事件の真相を探すこと。

全ての選択肢が出揃った後、殆ど迷うことなく決断を下した。彼
が選んだのは真相の究明。

今回の事件が悪魔の仕業だろうとそうでなかつたら、このまま何も
知らずにいるのは耐え難かつた。この市内で何が起きたのかを確か
めたい。そこに何者かの意思が介在しているならその人物或いは集
団が何の目的で魔都生誕を引き起こしたかを知りたい。

自分1人の力で何を確かめられるのかは分からない。そもそも一体どこで何を調べたら良いのかすら知らない。そして仮に真相を知ったとしてその後どう行動するかも今は何も考えていない。全くの不透明。真っ暗闇だ。
だがそれでもやると決めた。

意思が定まったら最早ジツとしてはいられなかった。嫌な記憶や絶望感が頭をもたげる前に腰を上げる。

先ずは本当に市内が封鎖されているかどうかを確認しに行くことにした。手持ちの情報では他に確かめられる事が無い。

彼は遠方の景色を覆い尽くす紫色の霧を目指して歩き始める。その奥に市を封鎖している壁・結界があると南方は言っていた。

遭遇

ここは溪瀬たにせ通り。6車線の道路が約7キロに渡り東西へ延びており、それと併走する高い建物が下界を眺めていた。市内でも特に交通量が多い場所の1つである。

樹流徒が意を決し動き始めてから数十分。彼はその溪瀬通りを訪れていた。歩道は人々で埋め尽くされ足の踏み場が無いと言っても過言ではない。そのため中央分離帯の植え込みを歩いていった。しかし分離帯に乗り上げたり対向車線に飛び出している車も多く決して移動しやすいわけではなかった。ちよつとした障害物コースみたいになっている。

車の間を縫って進み、場合によっては上を乗り越えなくてはならない。心身の疲労もあって余計に前へ進むのが遅れる。どこかで一度休憩を挟まなければ目的地へたどり着くのは無理そうであった。

霧が立ち込めている場所までまだ長い道のりが残っているにもかかわらず、既に周囲の視界は相当悪い。銀行前に設置された時計が秒針を刻んでいる。現在夜の10時半過ぎ。しかし相変わらず変化の無い空の色が時間の感覚を狂わせる。

樹流徒はそんな中を淡々と歩き続ける。今は希望も絶望も持たないようにした。目の前の景色にだけ意識を集中しひたすら足を動かす。

だが、ようやく通りの半ばに差ししかかったその時であった。

彼は不意にあるものを視界に捉え足を止める。遠く前方に大型トラックが1台停止しているのだが、その陰で何か動いた気がした。霧のせいではつきりとは見えなかったが、気のせいでは無い。

そこでしっかりと目を凝してみるとやはり動く影がある。その影は大部分がトラックの後ろに隠れており全体像が把握できないが、人に見えた。大きさからして恐らく子供。

生存者との予期せぬ遭遇に樹流徒は思わずあつと小さな声を出した。そして飛び出す。彼もしくは彼女がトラックの陰なんかで何をしているのかは分からない。だがそれは些末な疑問だった。とにかく生きている人がいる。それだけで良い。疲れを忘れて全力で跳び、走る。

だが、お互いの距離が大分縮まったところで再びその足は止まった。それどころか1歩後退する。

人影に違和感を覚えた。樹流徒は表情を硬くして今一度トラックの向こうを凝視する。

すると……人間だとばかり思っていたその影はどうも違った。人間と似た形はしているが明らかに異なる輪郭を持っている。尻と思われる部分からは長細い尾を垂らし、背中と思われる部分からは羽が生えているように見える。

謎の生物は樹流徒の存在に気付いていないようであった。彼は足音に気をつけながら反対側の車線へ移る。

背を低くして車の陰に体を隠しながら前へ進む。立ち止まると、息を殺して顔だけを出す。トラックの前でうごめく謎の生き物を覗き込んだ。

全身が凍りついた。やはりその生き物は人間ではなかった。動物

でもない。

長い尾と黒い羽を生やした小人である。肌は赤土色と紫色を混ぜたような不気味な色をしている。化物だ。

樹流徒はその存在を目の当たりにして一驚したが、それ以上に化物の行動に対して戦慄した。

化物の正面にはライダージャケットを着た人が仰向けになって倒れている。体格からしておそらく男性だ。バイクから落ちたのだろう。先程まではトラックの陰に完全に隠れており見えなかった。化物は背中を丸め男性の頭に顔を近づけ何かをしていたのである。耳を澄ませばクチャクチャという生々しい音がする。そこで何が起こっているのか容易に想像がついた。

人間を……食っている！

樹流徒の体は更に激しく凍りつく。指先は震えた。目の前で人間が謎の化物に捕食されている。信じられなかった。

それでも彼の脳内は体と真逆の反応を起こしていた。血が昇り熱くなっていた。カッとなる。

気付けば衝動的に車の陰から躍り出ていた。化物めがけ一直線に駆ける。

戦闘

化物は背後から接近する足音に反応した。即座に振り返るとその醜悪な形相を樹流徒へ向ける。

額からは小さな角が2本飛び出し瞳は血の如く真っ赤に染まっている。そして口の周りには言葉にするのもおぞましいモノが付着していた。

――ギギイ

化物は立ち上がり甲高い奇声を上げる。威嚇のつもりだったのかも知れない。だが樹流徒は止まらなかった。怒りと興奮の勢いに任せて化物を蹴り飛ばす。

彼のつま先に腹を強か蹴られた化物は地面を数メートル転がった。見た目より大分軽いようである。車のタイヤにぶつかって止まった。

樹流徒は化物に漁られていた男性の死体をちらと見る。既に原形を留めていなかった。特に頭部の損傷が激しい。吐き気を堪えながら目を逸らした。

倒れていた化物がウウウと低い唸り声を出しながら起き上がる。先の一撃にどれだけの効果があったかは分からないが樹流徒の目から見て殆どダメージを負っていないように見えた。

彼は再び自ら化物に向かってゆく。小さく跳躍すると上空から敵の頭部めがけ足の裏を落とした。

それは空を切りアスファルトを踏みつける。化物は身軽な動きで樹流徒の顔に飛びついていて。両手から伸びる鋭い爪を食い込ませ、

頭部に牙を突き立てた。

樹流徒は慌てて腕を伸ばし化物の背中に手を回す。手探りで羽を掴むと思いい切り引つ張った。

化物は思いの外簡単に剥がれた。空中で手足を暴れさせる。樹流徒は羽をしっかりと掴んで離さない。腕を振り下ろし敵を地面に叩きつけた。すかさず足の裏で踏む。

2回、3回と踏みつけるたびに化物は奇声を発する。だがその声は樹流徒の耳に届いていない。彼は反撃を受けたこともあつて必死だった。狂ったように踏み続けるとやがて化物は沈黙した。

微動だにしなくなった敵を眼下に据え、樹流徒は荒い呼吸を繰り返す。

パタパタと赤い液体が滴った。彼はそれが自分の頭部から零れ落ちているものと気が付いた。先程噛まれた時に切ってしまったらしい。酷く興奮していたため何も感じていなかった。それが今じわりと痛み出す。

だがその痛みを気にしている間もなく目の前で奇妙な現象が起きる。

化物の全身が崩れ始めたのである。まるで炎に焼かれた紙みたたく徐々に消えてゆく。同時に、消滅してゆく体から光の粒が大量に放出され空中を漂い始めた。赤黒い、なんとも不気味な色をした光だ。

化物は死んだのか？この光は何だ？樹流徒は奇怪な現象の連続を前にして棒立ちになる。

すると突然であった。シャボン玉のようにふわふわと漂っていた

光の粒が急に方向を変える。彼の元へ集まり始めた。咄嗟に手を払う。だが光は次々と飛び込んでくる。間もなく全て彼の体内に消えた。

直後、更に不可解な現象が起こる。樹流徒は自分の全身から力がみなぎるのを感じた。それだけではない。眠気や喉の渴きまでもが何処かへ消し飛んでしまった。

加えて頭の痛みが嘘のように引いてゆく。そつと傷口に触れてみると指先はぬるりとした感触と共に赤く染まる。だが新たな血が流れ出てこない。それは普通考えられない事であった。こんなに早く傷口が塞がるはずがない。頭部なら尚更だ。

樹流徒は今、己の体に何が起きているのか全く理解できなかった。考えてみたところで恐らく分かりはしない。何せ全てが超現実的であった。ただ五感で得た情報をそのまま鵜呑みにするしかない。

ところで、彼は自分の体のことはひとまず置いておくとして、化物に関しては1つだけ心当たりがあった。それは南方から聞いた悪魔という存在である。

「今倒したのは悪魔だったのか？」

樹流徒は独り言を呟く。

そういえば化物の姿は一般的に連想される悪魔のイメージと似ている。角と尻尾を生やした小人。思い出せば思い出すほど酷似している。だからといって本当に悪魔だという証拠にはならないが、同時に否定することもできない。

とりあえず今の段階で言えることは、常識では測れぬ何かがこの地で起こっているということであった。

結界

謎の生物との遭遇から更に数時間は経っている。

正確な時刻は確認していないが深夜には違いない。空色は未だ変わらず。

その間、樹流徒は自分の体に明らかな異変を感じていた。具体的にはいくら歩いても全く息切れをしないのである。足も疲れない。眠気も感じないし飢えや渴きもない。

お陰でまだ一度も休憩を取っていなかった。この状態を「気のせい」の一言で済ますのは無理がある。

体の状態がおかしい原因は何か？考えるまでも無かった。心当たりは1つしかない。化物から放出された光を体内に取り込んでしまったことだ。

樹流徒は、自分の身が心配である以上に気分が悪かった。人間の死体を貪っていた化物が何らかの形で自分に組み込まれているかも知れないと想像すると軽い吐き気がした。

そして彼は図らずも手に入れてしまった疲労を知らぬ体により、とうとう一度も中休みすることなく目的の場所にたどり着いてしまった。

そこは龍城寺市と隣の市の境目。これと言って特筆すべきところも無い全国至るところで見られる町並みが広がっている。それでも敢えて特徴を述べるなら辺りには一軒家の民家が多いということぐらいだろうか。いわゆる住宅地である。逆に大きな建物は全く無い。

辺りはいよいよ濃い霧が立ち込めておりわずか数十メートル先の様子が見えない。

樹流徒の目の前には車道が横切っている。それは丁度2つの市を区切る境界線であった。

彼は道路を渡る。これで一応龍城寺市から隣の市へと移ったことになる。南方は市が封鎖されていると言っていたが1歩も外に出られないというわけではないらしい。最も地図に合わせてキツチリ龍城寺市だけが封鎖されていることの方がおかしい話であった。

ならば一体どこまで進む事ができるのか？それを確かめるため樹流徒は更に奥へと進む。

するとそれからわずか3分足らずの後。
車道に沿って歩いてきた彼は立ち止まった。目を見開き、顔をゆっくりと持ち上げる。

彼の前方には巨大な壁が出現していた。現在の空と同色の平面が行く手を遮っている。霧のせいでもここまで続いているのかは不明。だがとにかく大きい。

樹流徒は一瞬我を忘れていたがすぐはっとして壁の間近まで駆け寄る。

するとそれは地面を深々とえぐり民家を真つ二つにしながら延びていた。表面からは紫色の霧が緩やかな勢いで放出されている。どうやらこの壁が霧を発生させているらしい。

もしかする南方の言っていた結界とはこれのことなのだろうか？樹流徒は今一度壁を見上げる。
それから思い切って掌で触れてみることにした。

すると結界（？）の表面は滑らかでプラスチック製品とよく似た感触が伝わってきた。握り拳を作って軽く叩くとコツコツと小気味良い音が返ってくる。壁の厚さは分からないが強い衝撃を加えれば壊せそうな気がした。

そこで実際思い切り蹴りとばしてみろ。

ビクともしなかった。一発蹴っただけでこれ以上叩いても無駄だと分かった。

どうやら南方から聞いた情報は少なからず本当であった。結界が市内全体を囲っているかどうかまでは分からないが巨大な壁が存在していることは事実だ。

魔都生誕が起きてから相当時間が経っているにも関わらず外部の人間と接触できないという事実も南方の話に信憑性を持たせている。

樹流徒は事実を悲観することなく受け入れる。むしろ真相に1つ近づけたことに満足すら感じた。

だがその余韻を味わう暇はなかった。突然、背後からただならぬ心配を感じる。

振り返ってみるとそこにはいつの間にか人間らしき者が立っていた。

ただし人間であると断言することはできない。その者は2メートル近い巨体でフードがついた黒いローブを頭からすっぽりと被っている。しかも右手には鋭利なナイフ、左手には巨大な弓を持ち無数の矢を背負っていた。

襲撃

アナタは誰だ？樹流徒が尋ねようとしたその時

フードを被った巨人は彼めがけ右手のナイフを投げつけた。

樹流徒は咄嗟に体を捻る。白銀に輝く刃が腕をかすめながら後方へ。結界に跳ね返って足下に落ちた。彼に怪我は無い。制服の袖が切れただけで事なきを得た。

コイツは敵だ。樹流徒は即座にそう判断した。総毛立つ。

問答無用で凶器を投げ飛ばしてくる相手が友好的な存在であるはずがないし、巨人の全身からは静かな殺気みなぎが漲っている。

樹流徒は足下のナイフを拾い上げる。ただしナイフと言うには少しばかり大きい。巨人の手に収まっていた時は小さく見えたが自分が持つてみるとナイフというより包丁に近かった。

彼がその巨大ナイフを拾っている隙に、巨人は背中の矢を1本抜き発射の姿勢に入る。

ギリギリと弦のしなる音がする。矢の先端が樹流徒の額に向けられた。

樹流徒は喧嘩や格闘技の経験が殆ど無い。まして凶器を向けられる事など初めてだった。この危機的かつ慣れない状況に心音が高まる。

そして矢はあっさりと放たれた。樹流徒の顔をかする。頬に赤い線が浮かび上がった。

殺さなければ殺されてしまう！この瞬間、彼の、人間である以前に一生命としての本能がそう告げた。

敵が次の矢を構える前に反撃しなければいけない。次の刹那、弾かれるように飛び出した。野生の獣を彷彿とさせる瞬発力で敵の懐に飛び込む。それが火事場の馬鹿力なのかそれとも化物を吸収した影響なのかは分からない。だがとにかく樹流徒の動きは神懸かっていた。

巨人の懐に入り込むことに成功した彼は躊躇い無く腕を伸ばした。ナイフを敵の腹に突き立てる。

キーンという金属同士のぶつかる音がした。同時に樹流徒の指に硬い手応えが伝わる。

刃は巨人の生身に届いていないようであった。フードの下に何かを着込んでいるようには見えない。となれば偶然矢筒の留金にでも当たってしまったのかも知れない。

しくじったと思った瞬間、彼は巨人が振り払った手に頬を弾かれる。首から上が消し飛んでしまったのではないかと錯覚するくらい重い一撃だった。

派手に地面を転がる。その拍子に刃物を手放してしまった。巨人の傍らに落ちる。

凶器が持ち主の手に戻る。巨人は代わりに弓と矢筒を投げ捨てた。少し身軽になった体で樹流徒の元へ歩み寄る。青紫色の長い舌を伸ばしナイフの刃を舐めた。

樹流徒が起き上がるうとすると、巨人は途端に走り出した。跳びかかり、抵抗する彼を腕力でねじ伏せ片手で素早く首根っこを

掴んだ。その動作とは対照的にゆっくりと凶器を振りかざす。

樹流徒は巨人の腕を両手で引き剥がそうとするがビクともしない。全く無意味な抵抗だった。

何か武器さえあれば。祈るような気持ちで視線を左右に動かす。しかし手の届く範囲には武器になりそうな物どころか石ころ1つさえ落ちていない。

絶望的な状況だった。打つ手が無い。

巨人はまだ凶器を振り下ろさない。丸太みたいに太い腕で樹流徒を押さえつけたまま彼をジッと見下ろしている。

遊ばれている。樹流徒は思った。相手は勝利を確信して自分の反応を見て楽しんでいる。

事実、この状況では誰の目から見ても彼に勝目は無かった。それでも諦めずに巨人の腕を退けようとするが暖簾に腕押しである。むしろ必死に抵抗すればするほど呼吸が苦しくなって悲惨な状況に陥ってゆく。

死ぬ。こんなわけが分からない状況で死んでしまう。樹流徒は焦りと共に意識が朦朧としてきた。

だが、その時であった。突然彼の左肩に焼けるような痛みが走った。

グオオオオ

けたたましい叫び声が轟く。何故かその悲鳴を上げたのは巨人だった。

樹流徒は全く状況を把握できなかったが、自分の両手を見てぎよつとした。

指の先から爪が伸びていた。人間のものとは思えない鋭利な爪が巨人の腕に食い込んでいる。先端に青い血を滴らせていた。

驚いたのは彼ばかりではなかった。巨人は慌てて腕を引っ込める。そしてフードの奥から覗かせる歯を食いしばりナイフを振り下ろした。

だがすでに樹流徒の動きを拘束しているものは無い。彼は体を転がして寸でのところで脱出した。地面を突いたナイフは小さな火花を散らす。

樹流徒はまたも常人離れた素早さで跳ね起きる。間を置かず敵に立ち向かっていった。本来ならばここで逃げるといふ選択肢もあったかもしれない。だが今の彼は頭に血が昇っていた。

巨人はナイフを突き出して迎撃する。しかし樹流徒にはその動作が驚くほど良く見えた。凶刃をかくくぐってロープもろとも敵の脇腹を切り裂く。攻撃が通った。青い液体が飛び散る。

巨人がぐわつと大きな声を出して前屈姿勢になる。樹流徒はその隙に胸を突き刺す。

すると巨人は滅茶苦茶にナイフを振り回し始めた。その姿に捕らえた獲物の反応を楽しむ余裕はもう欠片も無い。

樹流徒は再び攻撃をかいくぐりまた一撃。次の攻撃もかいくぐりもう一撃。体がふた回り大きい相手を圧倒する。

待て！オレの負けだ。

その時、樹流徒の手が止まった。

いきなり巨人が喋ったのである。確かに今、「待て」と言った。

巨人は恐らく人間ではない。それなのに言葉を発した事が余りにも意外であった。

「オマエはなんなんだ？」

樹流徒は攻撃を中断し巨人に素性を尋ねる。

「オレの名は“バルバトス”」

「バルバトス？」

バルバトスと名乗る巨人はフードに手をかける。さっと捲った。

現れた顔は人間に近かった。ただ、肌は藍鼠色で灼熱の太陽に照らされ乾ききった大地みたくひび割れている。虹彩は赤く燃えていた。

「オレは悪魔。魔界の貪欲地獄から来た」

「悪魔！」

樹流徒は驚いたが頭の中では「やはり」と叫んでいた。

この時、南方の話が概ね正しかったことを確信する。今まで見聞きした情報を総合すると悪魔や結界という存在をある程度信じざるを得ない。

ならばこの機を逃すわけにはいかなかった。樹流徒はバルバトスと名乗る悪魔から情報を引き出す事にする。

「何故お前達悪魔はこの土地に扉を開いた？何故結界を張る？話せ！」

激しい口調で問い詰める。

「知らない。オレはただ魔界と現世が繋がったという噂を聞いて遊びに来ただけだ」

バルバトスは落ち着いた口調で答える。

樹流徒は不思議と彼が嘘をついているようには聞こえなかった。

「現世へ来たのは遊ぶためだというのか？」
更に問う。

「そうだ」

「それなら何故僕を襲った？」

「オレは狩りを趣味にしている。獲物は別にオマエじゃなくても良かった。鳥でも動物でも魚でも良かった」

「生き物は皆死んでしまった。それも知らなかったのか？」

「いや。それは知っていた。だからオレは生きた獲物がある土地まで移動しようと考えていた。だが結界のせいで外に出られなくて困っていたところだ」

「じゃあ、結界が張られていることは……」

「ああ。知らなかった」

「何故悪魔なのにそれを知らないんだ？」

「オレは2つの世界が繋がったことと、それによってこの地に住まう多くの生物が死んだことしか知らない」

「ならばそれが誰の仕業かも知らないと言っのか？」

「そうだ」

「悪魔なのか？」

樹流徒はもう一度同じ疑問を繰り返す。

「当たり前だ」

と、バルバトス。本当にそれが当然であるかのような口ぶりをしている。

「分かった」

樹流徒は小さな吐息を吐いた。仮にバルバトスが嘘や隠し事をしていたとしてもこれ以上追求する手段は無い。拷問にかけて吐かせようという気もなかった。

すると戦意を失ったと同時に樹流徒の爪が瞬時に縮んだ。指先が元の形を取り戻す。

彼は戦いと尋問に夢中でこの爪のことをすっかり失念していたが、いよいよ己の体を不気味に感じた。

樹流徒が訝しげな顔で自分の指先を観察していると、バルバトスは徐に口を開く。

「オマエこそ一体何者なんだ？」

「え」

「一見普通の人間みたいだが不思議な力を使う」

「僕はただの人間だ」

彼は半ば自分に言い聞かせるように答えた。

悪魔の集う酒場

「ところでオマエの名前は？」
バルバトスが尋ねる。

「相馬樹流徒」

「ソーマキルトか」

「樹流徒でいい」

「そうか。ではキルト。オレはオマエに礼がしたい」
「礼？」

意外な申し出に樹流徒は少々間の抜けた声を出す。そもそも礼と言われても何に対しての礼なのか分からなかった。

「オレの命を見逃して貰った礼だ。オマエの強さに対する敬意でもある」

「ああ、そういうことか。折角だけど遠慮させてもらう。それよりも僕は一刻も早く情報を探しに行きたいんだ」

「情報とは？」

「この地が何故こんな目に遭わされたのか、その理由を探している」
「なるほど。道理で必死に色々聞いてくるわけだ」

バルバトスは得心して相槌を打ってから

「だったら尚更オレの礼を受け取った方がいい」
改めて樹流徒にそう勧める。

「それはどういう意味だ？」

「いいから来い。口で説明しても時間がかかるだけだからな」

バルバトスは地面に転がる弓と矢筒を回収する。そして何処かへ

向かって歩き出した。

「どこへ行く？」

樹流徒が声をかけても返事をしない。彼はとりあえず後を追ってみることにした。

.....

しばらく歩いた後、バルバトスは3階建ての大きな建物の前で足を止めた。ここまで黙ってついてきた樹流徒も立ち止まる。

そこは自動車販売店だった。建物はほぼ全面断熱フィルムが貼られたガラスに覆われており常に向こう側が透けて見える。中は明かりがついておらず薄暗い。1階のショールームには数台の新車が展示されている。

一体こんなところへ来て何をするつもりなのか？まさか車を1台プレゼントという話でもないだろう。樹流徒はそのようなことを考えつつ、もう少しの間バルバトスの行動を静観することにした。

バルバトスはガラスと向かい合って懐に手を忍ばせる。徐に何かおもむきを取り出した。

それは真つ黒な“鍵”だった。長さは10センチくらい。後部が矢羽を模した少し変わったデザインをしている。

すると彼は何を思ったか、いきなりその鍵をガラスに突っ込んだ。そんな事したらガラスにぶつかるか割ってしまうだけだ。

しかしガラスは割れない。それどころか鍵の先端を飲み込んで表面を波のように揺らめかせている。

「行くぞキルト」

バルバトスは目の前で起きている現象に関して一切の説明をせず足を前へと踏み出した。

すると彼の足がガラスの中に吸い込まれてゆく。もう1歩進むと体の半分が、さらにもう1歩進むと遂に全身消えてしまった。

その様子を傍らで見ていた樹流徒は多少驚いたが、しかし冷静だった。

色々現実離れたものを見せいでそういった現象を目の当たりにすることに対する種々の耐性ができてしまったのかも知れない。

彼はガラスの前に立つと思いついて飛び込む。バルバトスと同様、その場から忽然と姿を消した。

.....

揺れるガラスの水面を通り抜けた先。

気がつけば樹流徒は広いような狭いような空間にいた。

目の前には意外な景色が広がっている。それは酒場であった。彼はその入り口に立っている。

酒場は、床と柱が木、壁と天井は灰色の石を積み重ねて造られている。

奥にはカウンターがあり、その背後に立つ棚には所狭しとワインボトルが押し込まれている。壁には罫體とくろの形を模したランタンが均等な間隔で設置され目や口の穴からオレンジ色の光を放っていた。壁

の高い位置には木の枠に囲まれた小窓が取り付けられている。向こう側は真っ暗闇で星ひとつ無い。

かなり独特な雰囲気を持った店だ。現世ならば酒場というよりテーマパークの施設に見えるかも知れない。ただ樹流徒の目にはこじんまりとした店に映った。テーブルや椅子などの備品は全て木でできておりランタンから漏れる暖かそうな光と相まって不思議と優しい感じがする。

だが彼の意識は店の雰囲気や内装よりもそこにいる客たちへと向けられていた。

客席は全部で7つ。内2つが埋まっていた。それぞれの席には異形の生物が1体ずつ腰掛けている。悪魔に違いなかった。彼らはグラスを片手に飲食を楽しんでいる。

「ここは？」

「オレの店だ」

隣に立つバルバトスが口元を緩める。

「お前の店？するとここは魔界ということか？」

「そつだ。我々悪魔の世界へようこそキルト」

「ここが魔界」

樹流徒は今一度店内を見回す。周囲を漂う空気が心なしか冷たく感じた。

ようマスター。ソイツもしかしてニンゲンじゃないのか？

ニンゲンを調理する気か？言っとくがオレはそんなモン食いたくねーぞ。

すると客たちがそれぞれバルバトスに声をかける。

「コイツは食材ではない。手を出すなよ」

バルバトスは彼らにそう答えてから樹流徒を店の奥へと促し椅子に座らせる。

カウンターを挟んで向かい合った。

「さて。何か飲むか？愛欲地獄特産のブドウ酒など絶品だぞ」

バルバトスは棚の最上段に置かれているボトルに手をかける。

「酒……。いや、気持ちだけ受け取っておく」

「そうか。それは残念だ」

彼はボトルから手を離すと樹流徒の正面に立ち

「では早速本題に入るとしようか」

「本題？」

「うむ。キルトは情報が欲しいのだろうか？」

「そうだが……」

「いいか。この店には毎日客が集まる。彼らに話しかけてみれば何かオマエの役に立つ情報が手に入るかもしれないぞ？」

「え。もしかしてそのため僕をこの店に連れて来てくれたのか？」

樹流徒は視線をバルバトスの口から目元に移す。

彼は「まあな」と答え首を縦に振った。

「そうか。ありがとう」

素直に礼を述べる。ただ、先程命のやり取りをしたばかりの悪魔相手というのがどうにも妙な感じだった。

「では次に、オマエにこれを渡しておく」

バルバトスは懐に手を滑り込ませる。取り出した物をカウンターの上に置いた。

それは先程彼が自動車販売店のガラスに差し込んでいた黒い鍵であった。

「この鍵は？」

「オレの店と現世を直結する通路を作る鍵だ。2つの世界が繋がったのを機に作ってみた」

「凄いな。そんなことができるのか」

樹流徒は純粹に感心した。鍵の効果については既に体験済みなので疑わない。

「これがあればオマエはいつでもこの店と現世を行き来できるようになる」

「それは便利だな。しかし人間を自由に出入りさせていいのか？」

「問題ない」

バルバトスは即答した。

「僕がこの鍵を貰ったらお前は どうする？ 予備はあるのか？」

「構わない。オレはもう現世に行く気は無いからな。それに鍵は材料さえ揃えば数分で作れる」

「そうか。なら遠慮なく貰っておくよ」

樹流徒は鍵を手取る。全体を良く眺め回してからポケットにしまった。

「鍵の使い方は簡単だ。“現世の鏡やガラスに差し込む”。ただそれだけだ」

「本当に簡単だな」

「同様に店を出る時も扉の先にある空間に鍵を差し込め。そうすれば元の場所に戻る」

「ちなみに鍵を使わず店から出たらどうなる？」

「結論から言うとお前は現世へ帰れなくなるだろう」

「なぜ？」

「オマエが現世で鍵を使うと鍵はその位置を記憶する。だがオマエ

の体が店を出た瞬間にその記憶は消去される。消去された記憶は戻らない」

「もし仮にそうなら？」

「この店は魔界に存在する。何もせず店を出ればその先にあるのは当然ながら魔界の景色だ。オマエは自力で現世へ通じる扉にたどり着かなければ帰れない。それまでに数千の悪魔が襲い掛かるだろう」
「なるほど」

それは実質死を意味している。

店から出る時は必ず鍵を使わなくてはならない。樹流徒は今それを肝に命じた。

「イザとなれば、オレが現世に赴き鍵を使って店に戻りオマエにその鍵を譲ってやる……ということも不可能ではないが、今のところオマエのためにそこまでしてやる義理はない」

「そうだな」

樹流徒は首肯した。

「鍵の説明は以上だ。長々と話してしまっただが難しいことは何も無い。今までの話を一言でまとめると、“店の出入りには鍵を使え”。ただそれだけだ」

「ああ」

「それではキルトよ。早速客達に話しかけてみたらどうだ？何か良い情報が手に入るかも知れない」

「え。ああ……そうだな」

樹流徒は横目で客席を見る。先程から食事をしている2名の客はまだ席に腰を落ち着けている。どちらも特に樹流徒の存在を気にしている様子は無い。

「我々悪魔の中にはニンゲンを快く思っていない者もいれば興味を

持っている者もいる。キルトが接触すれば様々な反応が返ってくる
だろう」

「分かった。それじゃあ試してみるよ」

樹流徒は意を決して席を立った。

情報収集

彼は2体の客を交互に見る。先にどちらへ声をかけようかと考えた。すぐさま、単純に自分から近い席に座っている方でいいと結論を下す。

その悪魔はライオンの頭を持っていた。体の形は人間に近いが全身獣の毛に覆われている。尻からはサソリの尾、背中からは4枚の白い翼が生えていた。

樹流徒がその悪魔をジッと見ていると

「アイツは“パズズ”というやつだ」

バルバトスが彼の背に声をかける。

「パズズ？」

「ああ。ヤツから情報を得るのは難しいだろう」

「そうなのか」

それでも樹流徒はパズズという悪魔に話しかけてみることにした。彼の席へ歩み寄る。

パズズは大腿を開いて椅子に腰掛けていた。背もたれに上体の重みを全て預け気持ち良さそうにしている。夢見心地といった感じだ。テーブル上ではキャンドルの炎が揺らめき、大きな平皿を覆い尽くす巨大な生肉が色とりどりの野菜や木の実と共に盛られている。何の肉かは分からないが現世の生物には見えない。その横にナイフとフォーク並べられていた。

「済まない。ちょっといいか？」

樹流徒は横から話しかける。

するとパズズはうつとりしていた瞳を途端に鋭い獣の眼光に変え樹流徒に向ける。そこはかとなない敵意を放っていた。

「テメエ。ニンゲンだろ？」

「そうだ」

「オレ様はニンゲンが大嫌いなんだよ。失せろ」

「ちょっと聞きたい事があるだけなんだが」

「テメエ……耳がイカレてんのか？オレは失せろって言ったんだ」

パズズはいきなり眼前に置かれたワインボトルを掴むと雑な動作で投げつける。

ボトルは縦に回転しながら樹流徒の横を通り過ぎてカウンターにぶつかった。甲高い悲鳴を上げてバラバラに砕ける。破片は少量の酒と共に床へ飛び散った。

これでは取り付く島が無い。バルバトスの助言が正しかったことを理解した樹流徒は、今回はパズズとの会話を諦める。もう片方の客に話しかけてみることにした。

席を移して2体目の悪魔。彼は黒いカラスの頭を持っていた。グラスに突っ込んだクチバシを器用に動かして酒を飲んでいる。どこか滑稽な姿だ。

こちらのテーブルもキャンドルの光が辺りを照らしている。食べ物は置かれていない。

「食事中済まない。ちょっといいか？」

樹流徒は先程と同じ調子で声をかける。

カラス頭の悪魔はグラスからクチバシを抜いた。

「おつ。ニンゲンから声をかけられるとはね。何か用？」

彼はしゃがれた声で明るく返事をする。先のパズズと比べれば友好的に見える。

「聞きたい事があるんだが」

「オレに？一体何を？」

「現世と魔界を繋ぐ魔法陣のことは知っているか？」

「モチロンさ。もう魔界で知らないヤツなんていないだろう。なんせ久々にデカイ話だからな」

「ならあの魔法陣を呼び出したのが誰か知らないか？あとその目的も」

「いや。知らないね。オレも知りたくらいさ」

悪魔は言い淀むことなく返答する。

「じゃあ現世が結界に囲まれてる理由も知らないか？」

「悪いけど知らないね。というか現世が結界に囲まれてるってホントか？」

「ああ。僕の住んでいる土地に」

樹流徒は首を縦に振る。情報を得るところか逆に質問をされ答えてしまった。

本当ならばここが引き際かも知れない。しかし他にもう客がいないので何としてもここで情報が得たかった。彼はもう少しだけ粘ってみることにした。

「何か現世と魔界に関する情報を知らないか？」

「ん〜。あんま大したことは知らないな」

「それなら小さなことは知っているのか？どんな些細なことでもいいんだが」

本音だった。樹流徒はもう何の情報も持っていない。本当にどんな小さな情報でも良かった。

対して悪魔は2本の指先でクチバシの先をつまんで擦る。視線を僅かに落とし何かを考え込む仕草を見せた。

それからふと何かに気が付く。

「些細な情報ね。それだったら1つだけあるぜ。本当に大した話じゃないけどさ」

「よければ教えてくれないか？」

「“マモン” ってヤツがいるんだけどさ。知ってる？」

「マモン？ いや知らない」

樹流徒は首を左右に振る。恐らくマモンというのは悪魔の名前に違いない。

「あ、そう。結構有名なヤツなんだけどな」

「そのマモンがどうかしたのか？」

「しばらく現世に住み着くことにしたらしいんだ」

「悪魔が現世に住む？」

「それだけじゃないぞ。アイツ、ニンゲンを1人飼ってるって噂だぜ」

「人間を！」

「そ。理由は知らんがね」

悪魔は何でもなさそうに言う。

だが樹流徒にとってその情報はとても貴重であり衝撃的だった。自分以外の生き残りがいるかも知れない。

「そのマモンという悪魔は今どこに？」

樹流徒はテーブルに両手を着いて前のめりになる。無意識の行動だった。

「教えてやりたいんだが……思い出せないな」

「頼む。なんとか思い出してくれ」

「うーん……あ、そうだ。ところで現世には“こんびにべんと” って食い物があるらしいな？」

すると悪魔は何の脈絡も無いいきなりそのような事を言い出す。

「コンビ二弁当……いきなり何の話だ？」

樹流徒は小首をかしげた。

「何を隠そう。実はオレ前々からニンゲンの文化に興味があつてさ。少し前にコンビにべんとーの存在を知つたんだよ。それで一度食べてみたいって思つてたんだ。でも自分で現世に行くの面倒だしさ」

「そんなことより先にマモンのことを思い出してくれ」

「ああ。コンビにべんとー食つてみたいな。そしたらきつとマモンの居場所も思い出せるのに」

「……」

樹流徒は悪魔の意図を理解した。これは遠回しに交換条件を持ちかけているのである。「マモンの場所を知りたければ代わりに弁当を持ってきてくれ」ということなのだろう。

「分かった」

選択の余地は無かった。彼が承諾すると、悪魔はカラスの円らかな瞳を輝かせる。

「そうか。待つてるぜ」

そして嬉しそうな声を出した。

樹流徒は一度現世に戻り悪魔が所望するものを調達してくる事にした。直ちに出発すべくその場を去ろうと踵を返す。

「ちょっと待った。オマエの名前は？」

すると悪魔が彼を呼び止める。樹流徒はすぐに彼の方を見返つた。

「相馬樹流徒。樹流徒だ。お前は？」

「オレは魔界の侯爵・アンドラス。以後お見知りおきを……ってね」

コンボニへ

樹流徒は店を出る前にバルバトスに声をかけておくことにした。

一応彼に事の成り行きを報告しておこうと考えたためだった。

パズズの背中から殺気を感じつつカウンターの前へ戻る。

するとそこにはいつの間にか1匹の猫がいた。毛並みが良く全身灰色で両目は赤い。灰猫だ。

赤目の灰猫は先程パズズが割ったワインボトルの破片を勢い良く噛み砕き次々と飲み込んでいる。普通の猫とは少し違うらしい。

樹流徒がその光景に目を奪われていると

「そいつは“グリマルキン”だ」
バルバトスが彼に声をかけた。

「グリマルキン？」

「魔界に生息する稀少な獣だ。強靱な顎と特殊な胃液で何でも食べて溶かす」

「不思議な生き物だな。飼っているのか？」

「ああ。割れた皿や瓶だけでなく客の残飯や埃も食うから助かっている。時々余分なものまで食ってしまうがな」

「そうなのか」

魔界だけでなくそこに棲む悪魔や生物にも人間の常識が通用しない部分がある。考えれば当たり前前のことも知れないが、樹流徒はそれを今改めて実感した。

「ところでオレに何か用か？」

バルバトスが話題を変える。樹流徒は本来の用事を思い出した。

「実は、早速情報が手に入るかも知れないんだ」

「そのようだな。オマエとアンドラスの会話は全て聞こえていた」

「え」

「オレの聴力はニンゲンよりも少しだけ高い。店内の音くらいなら大体何でも聞こえてしまう」

「そうなのか。なら説明する手間が省けた」

「一度現世に戻るのだろうか？」

「ああ」

「店を出る時は鍵を忘れないようにな」

「分かっている。それじゃあ」

バルバトスに報告を済ませた樹流徒は店の出口へ向かう。

背後でグリマルキンがバオーと妙な鳴き声を発した。愛らしい見かけによらず野太い声をしている。

店の扉を開くと目の前は真っ暗だった。何も見えない。地面さえ無い。

何もせずこのまま先へ進んでしまうと魔界に出てしまう。現世に帰るためにはこの真っ暗な空間に鍵を挿し込まなければならない。

樹流徒は当然その事を覚えている。何せ下手をしたら命を落としかねない。忘れるはずがなかった。

鍵を取り出し、バルバトスから説明を受けた通りに使用した。

すると空間が穏やかに波打つ。現世で鍵をガラスに挿した時と同じ現象だ。樹流徒は鍵を引き抜いて揺れる暗闇に飛び込んだ。

すぐに青い光が彼の目に差し込んでくる。

それは現世の空から降り注ぐ光だった。彼は自動車販売店の前にいた。無事元の場所に戻ってくることができたらしい。

たった今出てきたガラスに触れてみると何の変哲も無い状態を取り

戻っていた。

とりあえず一安心して、それからすぐに気持ちを切り替える。アンドラスが欲している弁当を求めて歩き出す。幸いコンビニは適当に歩いているだけで必ずと言って良いほどすぐに見つかる。

実際、店は難なく見つかった。わずか数十メートル先にあった。

入り口の前に立つ。しかし自動ドアは開かない。

市内には電気が通っていないようだ。どこもかしこも建物の明かりがついていないし信号機のランプも止まっている。

原因は結界に違いなかった。送電線が全て遮断されてしまっているのだろう。そう考えると他のライフラインについても絶望的だった。

入り口を手動で開いて店内に踏み込む。店員と買い物客が合わせて4、5名倒れている。

レジの奥には事務所や裏口に繋がる通路があった。樹流徒はそこに入り事務所の扉を開く。それから店内の遺体を1体ずつ中に運び込み床に並べた。市内中の遺体を1人で弔うのは到底無理だがこれくらいのことはしておこうと考えた。発作的な行動である。

その後、無人となった店で本来の目的を果たす。レジでビニール袋を拝借し弁当のコーナーで適当な商品を数点詰め込む。

用事は済んだ。バルバトスの店を出て間もないがすぐ引き返すことにした。

だが彼は数歩進み、ふと何かを思い出したように立ち止まる。周囲には飲食物が溢れているというのに全く手をつける気にならない。それがどうしても心に引っかかった。

好きなジュースを1本掴んで中身を口に含んでみる。味覚は正常に働いている。美味しかった。しかし美味しいという事に満足を感じることができない。実に奇妙な感覚。自分の体が自分のモノでないような錯覚に陥る。

静かに瞼を下ろし短いため息を漏らした。それにより少し気が紛れる。

彼は初めて悪魔と戦った後から度々自分の体を気にしてきた。これ以上悩み続けると神経が参ってしまいそうだった。体のことを気にする余り心身の状態を悪化させてしまつては本末転倒だ。

そこで彼はしばらく自分の体について深く考えるのを止めることにした。

それよりも今はマモンという悪魔と、その悪魔に捕まっている人のことを優先して考える。意識的にそう仕向けることに決めた。

踵を返す。

マモンとは一体どんな悪魔なのか？何のために人間を捕らえているのか？

捕まっている人は一体どんな人か？その人はまだ生きているだろうか？

早速あれこれ想像しながら歩く。出口に差し掛かった。

その時、不意に樹流徒の視界に影が射す。

はっとして顔を上げると、ドアを挟んで目の前に1体の大きな化物が立っていた。悪魔に違いない。

頭に王冠を戴き4本の角を生やしている。口は人の頭を丸呑みできそうなくらい大きい。恰幅があり背丈はゆうに180センチ以上ありそうだ。鳥の足を持っている。

樹流徒の警戒心が足を1歩後退させた。
直後、悪魔が驀進する。その衝撃を前にお互いを隔てるドアは何ら抵抗力を持たなかった。ガラスが鉛細工の如くあっさり砕け散る。フレームはひしゃげながら倒れ無機質な音を立てる。
樹流徒はさらに数歩後退る。

店内に踏み込んだ巨体が急停止する。鈍重な動きで頭や肩のガラス片を払い、丸い瞳で樹流徒を見下ろした。

「ん？何かいるかと思ったらニンゲンじゃねえか」
悪魔は言葉を発した。それから口の端で呼吸をしてヒュルルとおかしな音を立てる。まるで口笛みたいだ。

「お前は悪魔だな？何の目的で現世に来た？」
「ニンゲンの分際で生意気な口叩きやがる」
樹流徒の問いに悪魔は嘲笑う。

「質問に答える」
「オレは食い物を漁りに来ただけだ。ニンゲンが作る飯はなかなか美味いからな」

悪魔はそう返答してから
「まあ……ニンゲン自身の肉は食べたモンじゃなかったが」
付け足した。

この瞬間、樹流徒は目の前の存在を敵と見なした。睨め上げる。片や悪魔の口からは大粒の唾液が大量にあふれ出す。顎から垂れて床に零れ落ちた。

「そついえばオレはまだ生きてままのニンゲンは食ったことがない。新鮮な状態なら美味いかも知れん」

太い腕で口元を拭う。目は血走り焦点が合っていない。

樹流徒は手に持ったビニール袋を敵の顔面めがけて投げつける。
この瞬間、戦いの火蓋が切って落とされた。

灼熱の戦い

悪魔は口をいっぱいに開きビニール袋を受け止める。歯肉の上を隙間なく並んだ鋭い牙を用いて袋の中身ごと噛み砕いた。あつという間に全てを飲み下す。

あの口に食いつかれたらひとたまりも無い。樹流徒は緊張に身を固めた。

敵と睨み合ったまま一挙手一投足に注意を払う。

すると次の刹那、悪魔の口が赤く光り輝き出した。

彼は直感的に危険を察知する。横っ飛びで商品棚の間に逃れ床を滑る。

コンマ数秒送れて炎の塊が彼の元いた場所を高速で通過した。直径20センチ前後の球体は壁に衝突し小さな爆発を起こす。火種が降り注ぎ床の上に散らばった。

樹流都は息を呑む。今度の悪魔は炎の塊を吐き出すらしい。さしずめ“火炎弾”とでも言ったところだろうか。人ならざる者と対峙している実感がいよいよ沸いてきた。

一旦悪魔から離れるべきだと判断した彼は身を屈めながら通路を駆ける。店の奥まで逃げた。間もなく次の火炎弾が発射される。棚の一部とそこに陳列されていた商品が四方に吹き飛んだ。

これでは迂闊に近づく事ができない。樹流都は棚の影からそっと顔を出して相手の様子を窺う。

悪魔は彼を追いかけて来ない。レジの前で仁王立ちしている。正面出入り口と裏口の両方を塞ぐ絶妙な位置取りだ。意図的にその場を選択しているのかは不明だが、もし樹流徒が店内から脱出しようとする場合には厄介なポジションだった。

彼は顔を引つ込めて息を殺す。この危機をどうやって切り抜けるかを考えなくてはならない。

多少の焦りもあつて良い案を出すことができずにいると、やがて3発目の攻撃が樹流徒の頭上を通り過ぎた。彼のすぐ背後に置かれているリーチイン冷蔵庫のガラスを粉々に砕き中の缶ビールを破裂させ床にばら撒く。

その衝撃で樹流徒は反射的に頭を抱えながら倒れた。しまったなどと思つている内に、棚の陰から飛び出した無防備な姿を敵の正面に晒す。

対して悪魔は大口を開けたままジツとしている。石像のように固まって全く動かない。

樹流徒はその隙に慌てて床を這つた。別の棚に身を隠して体勢を直す。

深く息を吐く。命拾いをしたことに胸を撫で下した。

一方で微かな疑念が彼の脳裏を過ぎる。何故今、悪魔は僕に炎を撃ち込んでこなかったのか？

床に倒れた時彼は完全に恰好の的だった。どうぞ撃つて下さいと言わんばかりの体勢だった。

果たして敵がそれを都合よく見逃してくれるものだろうか？樹流都

は内心で小首を傾げる。

「コソコソ隠れやがって！」

悪魔の怒声が響く。逃げの姿勢に徹する樹流都に対し立腹している。その様子からはバルバトスみたいに獲物を追い詰め楽しもうという雰囲気も微塵も感じられない。

こうなると悪魔が好機を見送ったことがますます不自然であった。一体何故僕を攻撃しなかった？樹流徒は考えを巡らせる。速まる心臓の音を邪魔に感じながら頭を回転させる。

すぐにはたと気付いた。あの時敵は炎を撃たなかったのではなく撃てなかったのではないか。もしかするとあの攻撃は連射が効かないのではないか。

そのように考えると一応はつじつまが合うのだった。そういえば先程から悪魔の攻撃にはある程度間が開いている。

樹流都が思考に神経を費やしていると再び炎の塊が冷蔵庫を直撃する。ガラスの破片が散り乱れた。

爆発の衝撃で樹流徒は床に手を着く。今度は素早く立ち上がった。勢いそのまま悪魔の真正面を走る通路に姿を見せる。

「ニンゲンは逃げるしか能がないのか？かかって来い！」

悪魔がギョロと目を剥き挑発する。しかしその態度とは裏腹に樹流徒を追いかけたり攻撃をする素振りは見せない。

彼は確信した。やはりあの飛び道具に連射性能は無い。付け入る隙を見つけた。

一旦棚の陰に戻る。

だが喜んでばかりもいらなかった。火が放たれるたびに店内は

破壊され、壁や床に飛び散った火種が延焼してゆく。すでに焦げ臭い匂いと共に黄色っぽい煙がうつすら立ち込めていた。急いで次の行動に移らなければならぬ。

この素早い判断を迫られる中、樹流徒は敵と戦うべきかそれとも逃げるべきかの2択で揺れる。

本音では立ち向かいたかった。あの悪魔に死肉を漁られた見ず知らずの人の仇を討ってあげたいという気持ちも多少は持っている。

問題は悪魔に対抗するための武器が無いことであつた。成り行きで戦いを始めたのは良いものの攻撃手段が無いことに今更気付く。間抜けな話だつた。辺りを見回しても利用できそうな物は無い。ガラスの破片を刃物代わりにして戦うというのも些か心もとなかつた。

この切羽詰つた状況で、彼はバルバトスとの戦いで使用した爪のことを思い出した。あれさえあれば悪魔に立ち向かう事ができるかも知れない。

戦う力を欲した。

すると彼の耳に不思議な音が聞こえる。メリメリと、生き物が内側から膜を破るような、小さくて少し不気味な音がする。

それは彼の指先が変形を始めた音だつた。彼の願いに応じるようにあの鋭い爪が伸びる。紛れも無く対バルバトス戦で使用したものに違いない。

樹流徒は寸刻自分の指先を凝視していたが、今は呆けている場合ではない事に気付く。次の火炎弾が来たら悪魔に攻撃を仕掛ける決心した。

すぐにその時が訪れる。炎が彼の数メートル手前で弾けて床を焦

がした。

舞い上がる火の粉に足踏みしたが、樹流都は次の瞬間柵の陰から躍り出て悪魔めがけ突っ切る。

その常人離れした速度に意表を突かれ、悪魔はおっと驚きの声を上げた。

彼はいと簡単に敵の懐に潜り込んだ。悪魔が縦に振り下ろした爪を避け、逆に自分の武器を敵の喉元に深く突き刺した。

ぐえっという潰れた声がして悪魔の頭上に輝く王冠が落下する。

青い血がほとばしり樹流徒の顔と袖を濡らしてゆく。

完璧な手応えだった。人間だったらほぼ間違いないで即死である。

だがそこに彼の油断が生まれた。“魔界の生き物には人間の常識が通用しない”。彼はバルバトスの店で学んだばかりのことを失念していた。

とどめを刺したと確信して気を緩めた途端、悪魔の爪が宙を疾走する。樹流徒の顔面を引き裂いた。

痛みと驚きから思わずうっとうと声を上げて仰け反る。

ただし混乱までに至らなかつたのが幸いだった。むしろ彼は攻撃を受けたことでカツとなり瞬間的に闘争心を爆発させる。力任せに爪を横になぎ払った。

耳慣れない生々しい音、そして鈍い音が合わさって聞こえる。

悪魔の首が床を転がった。小さくバウンドしてすぐに止まる。

「ニンゲン如きに……」

悪魔は胴体と分断されながらもまだ喋る。凄まじい生命力だ。それでも今度こそ致命傷を負っていた。間もなく頭部と胴体がそれぞれ崩れ始める。

赤黒い光の粒となり空中を漂った。樹流徒が初めて悪魔を倒した時に見たのと同じ現象である。

間もなく光の粒が彼の体へと引き寄せられ吸い込まれてゆく。全身に力がみなぎる。バルバトスの弓に裂かれた頬の傷、それからたつた今悪魔から受けた傷が同時に癒えてゆく。瞬く間に跡形も無く消えてしまった。

気付けば店内に充満する煙は黄色から灰色へと変色している。彼は急いで外に出た。

.....

小火^{ほや}を上げる店を遠巻きに眺めながら棒立ちになる。

樹流徒は厳しい戦いに勝利した余韻に浸ることもなく別のことで頭がいっぱいだっただ。

自分が、倒した悪魔の力を吸収しているのではないかという事に気付いたのである。

悪魔を吸収することで己の傷を癒し、身体能力の向上とその能力に耐え得る肉体の強化が行われているのではないか。

それだけではない。吸収した悪魔の体や能力を部分的に使用できるのではないかという事にも気付いた。一応根拠はある。それは2度に渡り窮地を救ってくれた謎の爪だった。あの爪が最初に吸収した悪魔の指から伸びていたものと同じものではないかという気がしてきたのである。

あとは単なる勘だった。何故か悪魔の力を使いそうな予感がする。他に言いようが無い。

樹流徒は果たして自分の仮説と勘が正しいかどうか、1つ試してみる事にした。例えば先程戦った悪魔の火炎弾を吐くことは出来ないだろうか。それを試みる。根拠が弱い割りに不思議と自信はあった。

空に向かって口を開き、炎を吐くイメージを頭に浮かべた。先程の戦いの記憶から可能な限り正確に火炎弾の映像を想起する。最後に「行け！」と強く念じた。

それに合わせ樹流徒は自分の体内が恐ろしい速さで構造を組み替えてゆくを感じる。胃から食堂、口にかけてチリチリと熱くなつた。

彼の口が光を放つ。次の瞬間、炎の塊が水色の薄闇を切り裂いて空へ上つてゆく。

いとも簡単に結果が出た。吸収した悪魔の能力を使用できる。間違いなさそうであった。

無意味な自信があったとはいえ余りにも思い通り成功してしまったため樹流徒は思わず苦笑する。このようなことが可能である原理は全く不明のままという気持ち悪さもあった。

それでも彼は自分の体について深く考えないと決めただけである。その決定に従う事にした。

数分後。彼は別のコンビニに寄って無事に弁当を入手した。

アンドラスから情報が得られることを期待してバルバトスの店へ戻ることにする。

悪魔倶楽部

樹流徒は弁当を調達したコンビニの出口に差し掛かると、外には出ずその場で立ち止まる。

自動ドアを使ってバルバトスの店へ繋がる入り口を開いてみることにした。そのためには“ガラスか鏡に鍵を差し込めば良い”と聞いている。それが本当に正しいのであれば目の前のドアを利用して問題は無いらずだ。

ポケットから鍵を取り出して挿し込む。

すると鍵の先端を飲み込んだガラスが水面のように揺れた。これをくぐれば間違いなく店に通じるはずだ。樹流徒は足を前へ進める。

視界を真っ暗闇が包んだかと思えば、瞬きする間もなく見覚えのある酒場の風景に変わった。たちまち辺りの空気も変わる。

「キルトか。どうやら鍵の使い方は間違えなかったようだな」

カウンターの奥に立つバルバトスが微笑する。樹流徒は軽く頷いてそれに応えた。

彼が店内を見回すと、ライオン頭の悪魔パズズ、それからアンドラスの両名はまだ席に腰掛けている。新たな客の姿は見えなかった。樹流徒はアンドラスの元へ向かう。

カラス頭の悪魔はグラス片手にうつらうつらしていた。半睡状態だ。クチバシが短い振幅で前後して啄木鳥きつこぎの玩具みたいになってい

る。

樹流都は彼の甘美なひと時を邪魔するのは少々気が引けたが、一刻も早く情報を得たい気持ちの方が圧倒的に強かった。アンドラスが目覚ますまで悠長に待っていてられない。

2、3回声をかけてみると、彼はしゃがれた声でうつんと唸って重い瞼を半分まで持ち上げた。首だけ樹流都の方へ向ける。

「ん……。おお。誰かと思えばニンゲンじゃないか。えーと。確かキルトだっけ？」

「そうだ」

「またオレに何か用かい？」

「現世に戻ってこれを持ってきたんだけど」

彼はビニール袋に手をつ突っ込む。ガサガサと袋の擦れる音がするたび、テーブル上に弁当が並んだ。

「おお。これはまさか」

眠た気な半月を描いていたアンドラスの瞳が満月になる。

「お前が欲しがっていたものだ」

「これがあの“こんびにべんとー”か。本当に入手してくれたんだな」

アンドラスは指を弾いて鳴らす。席に着いたまま上半身だけで小躍りを始めた。顔がカラスなのでその表情からは感情が読み取りづらいが、非常に嬉しそうに見える。

「それで……。例の話は思い出してもらえたか？」

樹流徒が尋ねると、アンドラスは軽快なリズムを刻んでいた上体の動きを停止させた。

「ん？ああ。マモンの居場所だろ？分かってるよ。たっ…た今思い出したぜ」

「どこにいる？」

「現世にマソ神社って場所があるらしい。マモンはそこに住みついたらみたいだな」

「あんな場所に」

今アンドラスが口にした“摩蘇神社”というのは、龍城寺市郊外の更に外れに佇む小さな神社であった。樹流徒はまだそこへ行ったことはないが、場所だけならば知っている。

すぐにも神社へ向かおう。彼は即決する。迷う理由は何ひとつ無かった。

情報をくれたアンドラスに礼を言って席から離れる。しかし彼は一心不乱にクチバシで弁当の中身を突付いている。樹流都の声は全く耳に届いていないようであった。

樹流都は逸^{はや}る気持ちを抑えつつ、しかし気持ち足早に客席を横切る。カウンターの前に立った。

バルバトスは一人で酒を煽っている。今は他にやる事が無いのか、どこか時間を持て余しているように見えた。巨大な手に収まったグラスは汗をかいている。積み重なった氷が水面より頭を覗かせていた。

彼の背後には一枚の扉があつてその奥から微かな物音が聞こえてくる。店の従業員が作業でもしているのかも知れない。壁際では灰色の猫グリマルキンが体を丸め寝転がっていた。

「ありがとう。おかげで貴重な情報が手に入った」

樹流都はバルバトスにも礼を述べる。

「話は聞こえていた。またすぐ現世へ向かうのか？」

「そうするつもりだ」

「そうか。また来るがいい。この店はいつでも開いている」
「ああ。それじゃあ」

あっさりとした会話を終え、樹流徒は踵を返そうとした。しかし体の向きを90度回転させたところで止める。「そういえば……」と呟きながら再びバルバトスの方に向き直った。

「ん？なんだ？」

バルバトスは口元まで運びかけたグラスをカウンターのの上に戻す。「今ふと思っただけけど、この店の名前は何て言うんだ？」

樹流都は素朴な疑問を投げかける。特に他意は無かった。世間話のつもりでもない。

するとバルバトスは首を左右に振る。樹流徒がその意味を理解できずにいると間を置かず口を開いた。

「この店は700年以上続いているがまだ名前はない。焦って決める必要も無いしな」

「そうなのか」

人間と悪魔。種族による感性の違いもあるだろうが、それにしてもスケールの大きな話だった。平均寿命が100年に満たない人間にとっては少し考えづらい話だ。

「しかし……言われてみればそろそろ店の名前をつけても良い頃かも知れん」

するとバルバトスは顎に手を当てた。そのままの姿勢で数秒の間考え込んでから

「うむ。そうだ。オマエが店の名を考えてくれないか？」

突然樹流都にそのような提案を持ちかける。

「え。何故僕が？」

思いもよらぬ展開に樹流都は目を丸くする。何故そういう話になるのか分からなかった。

対照的にバルバトスは淡々とした語り口でその理由を述べる。

「ニンゲンが命名した店というのは未だ前例が無いのだ。もしオマエが協力してくればこの店は悪魔史上に名を刻む事が出来る」

「そんなことで自分の店の名前を決めてしまつて良いのか？」

「ああ。だからこうして頼んでいる」

「だけど……」

樹流徒は躊躇う。自分の些細な疑問がよもやこのような依頼に発展するなどは考えてもみなかった。

「さあ。早くしろ」

バルバトスはもうすっかりその気である。彼を急かした。

「本当に僕で良いのか？」

樹流徒が念を押す。

「良い。今すぐ頭に浮かんだものを言え。それにする。さあ、言え」

「分かった。じゃあ、そうだな……」

樹流都は瞬発的に想像力を働かせ

「悪魔倶楽部……とか」

言われた通り何の捻りも加えず、ただ頭に浮かんだ文字列をそのまま声にして出した。

「ふむ……。アクマクラブか。オレ達悪魔からしたら妙な響きだ。

しかしそこがいかにもニンゲンが名付けた風で良いかも知れん」

「そうか。もし気に入ってくれたなら良かったが……」

「うむ。では、この店はたった今からアクマクラブにする」

バルバトスはニヤリとする。それからグラスの中で揺れる液体を一気に飲み干して心地良さそうな息を吐いた。

ゴーストロード

バルバトスの店改め悪魔倶楽部を後にした樹流徒はコンビニの中に立っていた。より正確に言えば悪魔倶楽部への扉を開いたガラスの前まで戻ってきた。

鍵の使い方に関してはもう何の問題なさそうだ。

彼はアンドラスから得た情報を信じてこれから摩蘇神社へ向かう。マモンに捕まっている人間がまだ生存していることを強く望んだ。

目的の場所は現在地からずっと北上した場所に位置している。隣接する市との境目に近い。

移動にはかなりの時間を要することが予想された。悪魔を吸収したことで無尽蔵の体力を得た樹流徒が走り続けたとしても、道の状態を考慮に入れると1、2時間で到着できるような場所ではない。だからといって他の交通手段を使うことも不可能だった。

樹流都は空路を進む事はできないだろうかと考えた。具体的には吸収した小人型悪魔の羽を使って飛行できないだろうかという案だ。早速試みたところ、彼の体に対して羽が小さ過ぎる。そのため靴裏を地面から離すことすらできないという結果に終わった。ついでに羽を出した衝撃で服の後ろが破れてしまうという残念なオマケ付きである。

彼は自分の足で地上を行くしかないと悟った。

.....

急ぎ先を目指すこと数分。樹流都は広い国道の中にいた。

そこは彼が初めて悪魔と遭遇した溪瀨通りにも匹敵する交通量を誇る。ジャンクションが存在し県外から出入りする車がひっきりなしに走っているためである。空中では環状道路がとぐるを巻きその更に頭上を高速道路が直進していた。

するとこの辺を歩きはじめて間もなく、樹流都は周囲の景色に違和感を覚えた。足を止める。

違和感の正体を探る必要は無かった。それは余りにも明白。あからさまだった。

いつの間にか視界に映る死体の数が極端に少なくなっているのである。市民の死体がどこかへ消えてしまっている。

交通量から考えて、ここら一帯にも派手で無残な光景が広がっていることは先に想像できた。

ところが予想に反して歩道は空いている。数名分の死体のみが横たわっている。無人の車や転倒したバイクなどは大量に放置されたまままだがドライバーたちの姿まで見えない。

消失した人々の数は恐らく1000や2000程度ではないだろう。

辺りの空間が異様に広くなった錯覚に襲われた。生が失われ死が圧倒的に不足している不気味な空間にぼつりと佇む。

ここに倒れていた市民は一体どこへ消えてしまったのか？樹流都は半ば狐につままれたような気分のままその理由を想像してみた。

みんな悪魔たちの餌になってしまったのかも知れない……という以外の答えが浮かばない。

直後、その私論を否定する。死体が悪魔たちに食い散らかされた

にしては道路が綺麗過ぎることに気付いた。

辺りには骨はおろか細かな肉片すらない。血痕は多少残っているがそれは黒い光を浴びて乗り物から転落したり、道路からはみ出た乗り物に轢かれてしまった人たちから流れ出たものと思われる。溪瀬通りと比べて血の数や量が特に多いという事はない。

そうになると、市民たちの死体は傷付けられることなくこの場から消失したことになる。

何者かによってどこかへ運ばた可能性もあるし、人間には及びもつかない方法で消されてしまった可能性も今や否定できない。

悪魔の仕業としか考えられないが、このようなことをする目的については推測すらできない。

事実を知る術も無く……樹流徒はゴーストタウンならぬゴーストロードと化したこの道を通り抜けることにする。もう少しこの場を調査したい気持ちもあるが今は目的地へ急ぐことが最優先だった。

だが歩き始めようとしたその時、前に出かかった彼の足が止まる。ずっと遠くに2つの小さな影が移動しているのを見つけた。人間でないことだけはすぐに分かる。影は横並びで空を飛んでいる。

悪魔に違いないと判断した樹流徒はとりあえず車の裏に隠れた。腰を低くして窓ガラス越しに様子を窺う。

目を凝らすと飛行している生物は大きさや形からして小人型悪魔と同種に見えた。背は推定1メートル前後、額から2本の角、背中から黒い羽を生やしている。

彼らに見つかれば戦闘に突入するかもしれない。樹流都の指先に力がこもった。

小人型悪魔たちは一定の速度で宙を泳ぎ道路上を横切る。地上で息を潜める樹流都の存在に気付く様子は無い。建物に近付くと高度を上げ屋根を越えていった。姿が見えなくなる。

数秒待って、樹流徒は腰を上げ車の陰から出た。辺りを見回し空を仰ぎ見る。他に動いている物体は存在しなかった。

「今市内には何体の悪魔が存在するんだ？」
独り言を呟く。

魔都生誕から少なくとも半日は経っている。これから現世を訪れる悪魔が増加してゆくかも知れない。

不思議な出会い

道が弓なりに伸びている。両脇は緩やかな勾配の土手になっており生え放題の雑草に覆われていた。片側から川の流れを見下ろす事が出来る。それを辿ってゆくと先には大きな橋が架かっていた。空は広くてへんに電線が目立つ。同じ都市の中だというのに中心部とは対照的な風景だ。

樹流徒はようやくこの場所までやって来た。

あと少し走り続ければ分かれ道に差し掛かる。内1つが林道に繋がっていた。

そこは車道が蛇のように激しく曲がりくねり落ち葉や草むらが側溝を隠している。少々危険な道として地元ドライバーたちから知られていた。脇には野生動物の飛び出し注意を促す看板が設置されている。

摩蘇神社はそんな林道の中、人目を避けるかのようにひっそりと佇んでいた。目的地はもう目の前である。

ここに至るまでの間、樹流都は幾度か移動中の悪魔を目撃し、出くわした。

また逆に彼らから自分の姿を捕捉されたりもした。合わせて10回前後そついう事があったと記憶している。

その際、彼はなるべく戦闘を避けた。逃走したり隠れたり道を迂回するなどしてとにかくやり過ごした。

悪魔が純粹に人類の敵だとしたら漏らさず相手をしていたかも知れない。だが樹流都はバルバトスやアンドラスと知り合ってそれは違う事を知っていた。

実際、遭遇した悪魔たちの中には彼を凝視するだけで手を出してこない者もいた。完全に無視して通り過ぎていった者もいた。

存外悪魔という種族は人間に対して好戦的とは限らない。樹流都はそんな印象を持ち始めていた。

だからといって執拗に襲い来る敵に対してまで背を向けるつもりはなかった。彼らとは戦わなくてはならない。

数分後。

ようやく彼は摩蘇神社の前に到着した。悪魔との衝突を回避することに幾分時間を費やしてしまったが、無事にたどり着くことができた。

結界が近いせいで急激に紫色の霧が濃くなっており視界が悪い。鳥居をくぐると、雨風に晒されながら幾春秋を経た石段がずっと続いている。最上部は霞がかって良く見えないが樹流都の目算で50段程度の長さはあった。それを上り切った先に社がある。

彼は一度立ち止まり顎を上げた。深い息を吐いてから石段に足をかける。

1段1段が高くて幅が狭いため足場は余り良くない。両脇には金属製の手すりが設置されており完全にさび付いて褐色に染まっていた。手で掴むとざらざらしている。その更に外側から木々がお辞儀をしていた。年中生い茂った葉が上空から照らされ地に薄い影を落とすている。

こんな変わり果てた世界の中にあっても神社は神秘性を保っている。静けさがそれをより一層引き立てていた。靴裏が石段の肌を擦る微かな音だけが耳に届く。樹流都は自然と気が引き締まった。

と、その時。

彼はふと何者かの視線を感じた。はっとして顔を見上げると、石段の先、霧の向こうに不鮮明な影を見つける。

人が悪魔。それなりの大きさを持った何かがいつの間にかそこに佇んでいた。

まさかマモン！？樹流都はすぐさま悪魔の爪を発動して身構える。影は微動だにしない。物みたいに静止していた。

薄気味悪さを覚えながら慎重に互いの距離を縮めてゆく。

やがて相手の姿がはつきりしてきた。

果たしてそこにいたのは意外な存在だった。

樹流徒と同じ年くらいの少女である。病的に白い肌をしており髪は肩口の辺りまで伸ている。紺色のチュニックにブーツといういでたちで直立不動の構えを取っていた。

外見は服装も含めて完全に人間だ。悪魔には見えない。

彼女は樹流都の存在を無視してずっと遠くの空を眺めている。虚脱状態に陥っているわけではない。どちらかといえば花鳥風月を愛する詩人のような雰囲気を持っていた。

樹流徒は寸刻彼女に目を奪われていたが、すぐ我に返って悪魔の爪を解除すると石段を駆け上がった。途中つまずきそうになりながら上り切る。

少女の隣に立つ。彼女は間近で見ると余計に青白かった。肌と黒髪のコントラストが映える。唇も熟れた林檎のように赤い。それでいて眉ひとつ動かさないの、精巧な人形もしくはは生きたまま死んでいる人のようだった。

「君も生き残りか？それとも、もしかしてマモンに捕まっている人間って君の事か？」

樹流徒は早口で尋ねる。喋り終えてから息をのんだ。

すると生死不明さを漂わせていた少女が初めて動きを見せる。静かに首を振って樹流都の問いかけを否定した。

「この土地……なんだか面白いことになっているね」
続けて小さくも堂々とした声でそう呟き、隠微な笑みを作る。

「面白いつて何だ」

樹流徒は一瞬顔をしかめた。それから気を取り直して彼女に尋ねる「君はよその土地から来たのか？」

少女はその問いかけには答えない。どこか年齢不相応な怪しくも美しい笑みを浮かべたまま

「君も面白いね。その体は人だけど人じゃない」

そのような言葉を残し、緩やかな足取りで石段を下り始めた。

「待て。お前は誰だ？」

樹流徒は急いで声を掛ける。

後ろから呼び止められて、少女はそつと振り向いた。彼と視線を合わせる。

しかしそれだけだった。沈黙を守ったまま再び彼に背を向けて遠ざかってゆく。

樹流都は動かなかった。少女の背中が消えてゆくを黙過する。

折角得た人間との邂逅である。この機を逃すべきではない。頭ではそのように理解していたが不思議と彼女を追いかける気になれなかった。

仮についていったところで彼女は何も答えずに自分の前から去るだろう。確信に近いものを感じる。

異空間

摩蘇神社には拜殿も神楽殿も無い。小さな本殿、それから参道脇に小屋みみたいな社務所と手水舎ちょうすいしゃがあるだけの控えめな佇まいをしていた。

社は強い風に吹かれればいつ倒壊しても不思議ではない。それだけ老朽化が激しかった。好意的な言い方に置き換えるとそれだけ歴史がある建物だ。手水舎の屋根は既に一部が腐って小さな穴が開いていた。

外観からして本殿内部の広さは10畳にも満たないことが推測できる。悪魔が住みつき人間を捕らえておくには長所よりも短所の方が目立つように思えた。

それにしても、いくら小規模とはいえ神社は神社。神の住む家である。

そこに悪魔が居座るとは世も末だと、樹流徒は皮肉に近いものを感じた。実際世界が終わっているかも知れないだけあって笑い話にもならない。

最も、アンドラスがくれた情報の真偽は未だはつきりしていない。社の中が無人も限らなかつた。実際全く人気を感じない。

境内に人の姿は見えない。樹流徒は参道を渡り賽銭箱の横を通り過ぎて入り口の前に立った。

古い引き戸に手をかける。その向こう側に真実があるはずである。

戸は建てつけが悪くガタガタと頼りない音を立てながら開いた。

次の瞬間、彼の眼前に現れたのは悪魔でもなければ囚われの人間でもなかった。無人の部屋でもない。

真っ黒な空間である。

先の見えない空間が水面のように揺れていた。悪魔倶楽部の扉を開いた時に現れるものと同じに見える。

中に手を突っ込んでみると簡単に向こう側へ抜けた。とりあえず先に進むことはできるらしい。

この黒い壁を通り抜けた先にはきつと尋常でない光景が待っている。樹流都はそう予見した。

鬼が出るか蛇がでるか。今更引き返すつもりなど毛ほどもないがそれなりの覚悟は必要だった。

数秒の間その場に立ち止まり……決意を固めると一気に中へ飛び込む。

果たして彼の予感はずしかった。

目の前に現れたのは本来そこにあるはずの本殿内部ではない。ずっと遠くまで伸びる長い長い木板の廊下だった。

廊下は一本道で幅が狭い。煤すすにまみれたみたいに汚れた白い壁が両脇を固めている。

壁に窓らしき物は一切ついておらず下界の光は遮られていた。その代わり5メートル程度の間隔でロウソクを乗せたこま蜀台こまうすだいが取り付けられている。

無風の中、小さな炎が真っ直ぐ立っている。他に明かりは無いため辺りは薄暗い。

まるで怪談的一幕にでも出てきそうな場所だ。悪魔よりも霊や妖怪などが似合いそうな雰囲気である。

いよいよ何かが起こりそうだった。樹流徒は予め悪魔の爪を発動して臨戦態勢に入る。

慎重に歩を進めるとその度に床が軋んで音を鳴らした。他の音は全く無い。彼は自分の息遣いと心音が甚だ良く聞こえた。

警戒を怠らないように気を張ったまま移動を続けて数分が経過する。

今のところ悪魔が襲いかかってくることもなければ危険な罠が待ち受けているわけでもない。どこまで伸びているのか見当もつかない一本道をひたすら歩いてきただけであった。

振り返ると遙か後方まで下がった出口はすっかり見えなくなっている。

そのことを除けば単調な景色の連続である。樹流都は緊張を持続するのが難しくなっていた。

同時に微かな不安を覚える。なんだか先程から同じ場所を歩かされているような錯覚に陥り始めていた。

だがそのような状態でもう少し進んでみたところ、彼の不安は突然杞憂に終わった。

分かれ道が現れたのである。

道は正面と左右の3方向に分かれていた。いずれの道も再び長い直線になっており突き当りが見えない。

樹流徒は景色の変化が訪れた事に安堵しつつ、どの道を進むべきかの三択を迫られる。

結果、迷うことなく直感的に左を選んだ。

再び真っ直ぐな廊下に行く。余りに危険が迫ってくる気配が無いのでつい足早になった。

やがて前方に分かれ道が見えてくる。先程と同様3方向に分岐していた。

樹流徒は立ち止る。今度はすぐ進路の選択をせず慎重になった。

十字路の真ん中に立って考える。もしここが単なる巨大迷路ならばいわゆる右（左）手の法則が使えるかも知れない。真っ先に思い浮かんだのはそれだった。

壁に右（左）手をつきながら進めばいつか必ず出口に到達できるというものだが……しかしこの常識外れの空間でそれが通じるとは限らないのが問題である。

かといって他に良いアイデア持ち合わせているわけでもない。勘のみを頼って闇雲に進むよりは幾分マシだと結論付けて、樹流徒は法則に従ってみる事にした。

前の分かれ道を左に曲がってきたため、今回の分岐も必然的に左を選ぶことになる。

次は目新しい場所に出ることができるだろうか？樹流都は5割の期待と4割の警戒、1割の不安を心胸に足を前へ動かす。

さほど間を置かぬ内に彼の期待は失望に取って代わった。今度も全く同じ分かれ道が現れたのである。

その次も、その次も……。

新たな景色が一向に現れない。行き止まりすらなかった。

再び同じ場所を歩き回らされているような錯覚に陥る。先に進んでも現れるのは十字路ばかり。樹流都は自分の現在位置が分からず方向感覚も完全に狂ってしまった。

それでも左手の法則に従って行くと、次も3択の分かれ道に差し掛かったので不安が徐々に強い疑念へと変わってくる。疑念で済んでいる内はまだいいかも知れないがこんなことを繰り返していたらいずれ発狂してしまう。

そろそろ何か手を打たなければと思っていると、今度も同じ分岐点が現れる。樹流都は立ち止まった。

数秒考えて、今いる場所に目印を残してゆくことにした。そうすれば再びこの場を通りかかった時には気付くことができる。些か捻りのない手段かもしれないが、先程と同じで無策よりベターだろうと考えておく。

決断したところで早速目印を残す事にした。樹流都は腰を落とす。爪で思い切り床を引っかいた。

床には小さな傷1つ残らない。見た目や肌触りはタダの木板なのに恐ろしく硬い。再度挑戦してみると同様の結果が返ってきた。

樹流都は床に目印を刻むことを諦めて、次に壁や柱で同じ事を試してみる。

こちらでも変わらぬ結果に終わった。

あと使えそうなものといえばロウソクくらいしかない。火を消す事で目印にできそうだった。口で吹き消そうと試みる。ところが強い風を受けた火は消えるどころか微動たりともしない。あからさまに不自然だった。まるでテレビのモニター越しに映る火を吹き消そうとしているかのようである。

不審に思っ てよくよく見れば蟬せみが垂れていなかった。火が灯っているにもかかわらずロウソクの先は全く溶けていないのである。

樹流都はひとさし指をそつと火に近づけてみる。全く温度を感じなかった。

壁や床だけでなくロウソクまで……この空間に存在しているものはみな本物ではない。

こま蜀台からロウソクを引き抜こうとしても恐ろしい力で蜀台にくっついており梃子てこでも動いてくれそうにない。また蜀台自体もしっかりと壁に固定されていた。

それならばと爪を使ってロウソクを切りつけてみる。キンと硬いモノ同士がぶつかる音がして樹流都の指先がじんとしたただけであった。

この空間にあるものを利用して目印を残す事は出来そうにない。樹流都は仕方なく自分の持ち物を置いてゆくことにした。制服の袖を破って床の隅に残しておく。

目印ができたところで分かれ道を左へ曲がった。

わずか数分後。

樹流徒は立ち止まっていた。彼の眼下には非常に見覚えのある布の切れ端が落ちている。

元の場所に戻ってきてしまったらしい。同じ場所を歩き回っているような気がしたのは錯覚ではなかった。こうなると最初の分岐点から全く先に進めていない可能性がある。

一体この空間はどうなっているのか？樹流都は黙考する。

もしかすると扉をくぐった瞬間迷路の中に飛ばされてしまったのかもしれない。

スタート地点が迷路の中に存在する場合、右（左）手の法則を使うことで延々と同じ場所を回ってしまう場合がある。

或いは3つの内正しい道を選ばなければ元の場所に飛ばされてしまうという特殊な仕掛けなのかも知れない。

彼はそれらの可能性に容易く考えが及ぶくらい非常識に慣れつつあった。

いずれにせよ左手の法則が使えなくなった事だけは間違いない。彼は次の分かれ道を右折することにした。

その道をずっと歩いていくと……

ギイイイ

樹流都の心臓が弱く跳ねた。聞き覚えのある奇声が前方から聞こえてくる。彼は咄嗟に身構えた。

薄闇に目を凝らすと小さな影が縦に並んで向かってくる。

小人型悪魔だ。しかも3体同時である。先頭の悪魔は羽を広げ空中から、大分離れて残りの2体が後ろから床を駆けてくる。

再会

悪魔たちの急襲に対して樹流都が何かを思っている暇など無かった。

彼の目線よりやや高い位置を滑空する先頭の悪魔が問答無用で襲い掛かる。黒い羽を折り畳んで降下し、尖鋭な牙を剥き出しにして樹流都の頭部を狙った。

一方、樹流都は動じることなく爪で迎え撃つ。後ろ足に力を入れて上半身に体重を乗せると右手を強振した。

悪魔の腕が肩の根元からバツサリ切り落とされる。樹流都としては敵の正中線に沿って真つ二つにする狙いだったが少し逸れた。

悪魔は叫び声と傷口から溢れる青い液体を撒き散らかして床に墜落する。

分断された腕は樹流都の足下に転がり消滅した。赤黒い光の粒となつて彼に吸い込まれる。

どうやら悪魔は体の一部でも吸収できるらしい。新しい発見だった。

片腕を失った本体はまだ生きている。全身を小刻みに震わせながら立ち上がるうとしていた。

樹流都はそれを力の限り蹴飛ばす。

悪魔は壁に1度跳ね返つてから受身も取らず落下した。再度起き上がる力は無い。今度こそ全身消滅してゆく。

その間に後続の悪魔2体が樹流都の鼻先に迫っている。樹流都は迫る敵を火炎弾で狙い撃った。高速で飛ぶ炎の塊が1体に着弾して真っ赤な火の粉を散らす。小さな爆音と断末魔が響いた。

すると仲間を失ってすっかり氣勢を削がれた最後の1体が急転進する。そのまま逃走を開始した。すぐ先の角を右に曲がって消える。

もう悪魔の姿は無い。戦闘開始から終了までもの数十秒。結果だけを見れば樹流徒の圧勝である。

だが火炎弾の連射が効かないので彼としては正直助かった心地だった。敵の数があと1体多かつたら手傷を負わされていたかも知れない。

それにしても、今倒した悪魔たちがマモンなのだろうか？

いや……多分違う。

樹流徒は自問自答した。

マモンは多少名の知れた悪魔だと、アンドラスは語っていた。

彼の口ぶりからしてマモンは単体しか存在しないような印象を受ける。それに今の小人型悪魔たちが有名な悪魔だとは余り考えられない。

だとすればマモンはこの空間のどこか別の場所にいる。

彼はそう確信して再び歩き出した。

服の切れ端を残して目印にする方法を利用しながら着実に先へと

進む。

そうしている間に、樹流都は2つのことを発見した。

1つは、この空間で道の選択を誤ると手前の分岐点まで戻されてしまうこと。正しい道を覚えておかなければ何時まで経っても先へは進めない仕掛けになっている。

もう1つは、正しい道を選ぶとその先には必ず小人型悪魔たちが複数体で待ち構えていること。少なくとも3体、多い場合は7、8体は固まっていた。

彼らが単にこの空間を棲家に行っているのか、それともマモンの仲間や手下として警備をしているのかは不明である。ただ彼らは樹流都の姿を視認すると例外なく襲い掛かってきた。

樹流都は集団で向かってくる悪魔たちとの戦いを強いられ、攻撃を受けずに済むのは不可能だった。

爪で顔や背中を引っかかれ牙で四肢に噛みつかれた。その激痛たるや筆舌に尽くし難く、彼は幾度となく顔を歪め、思わず短い悲鳴を漏らした時もあった。

普通だったら途中で力尽きていたかも知れない。

しかし幸いにも彼には“倒した悪魔を吸収して傷を癒す能力”がある。その力に救われて実質無傷で先へ進むことができた。

樹流都はこれまで不気味でしかなかった現在の己の体に対して初めて感謝した。

10前後の分岐点を越えた頃には、戦いもすっかり板に付いてしまった感があった。

既に気を抜きさえしなければ小人型悪魔たちはそれほど苦戦する相手ではなくなっていた。敵を吸収する度に樹流都の力が僅かずつ増

している影響もある。

一方、着ていた制服はスタボロだ。ここを出たら着替える必要がありそうだった。

それから更にいくつの十字路を通り抜けただろう。倒した悪魔の数もそろそろ三桁を数えるのではないかと思われた頃。

樹流徒は返り血を浴びすぎて気持ちが悪くなっていた。元々スブラッターの類に対して強いわけではない。それに幾ら敵を倒して傷を治せるとはいっても攻撃を受ければ痛い。精神的には辛かった。

敵の肉を裂いて傷を負う事にいい加減うんざりしていると、ようやくである。彼は今までとは全然違う景色の前に辿り着いた。

現れたのは本殿内部の、本来の姿だった。

数百年ものあいだ人の汗と垢が染み込んですっかり黒ずんだ床が狭小な広がりを見せている。部屋の四隅には口ウソクが置かれ、廊下と同じように火の先端が真っ直ぐ天井を指していた。奥の祭壇に御神体の鏡が祭られ薄闇の中だいたい色の光を反射している。

先に道はなく行き止まりになっていた。

ここで樹流徒は思わずあつと声をあげる。

部屋の隅で誰かが小さくなつて座っているのを見つけたのである。しかも良く見れば彼の知っている人物だった。

非常に馴染みのある制服に身を包んだ長い黒髪の少女。どこかドライな印象を与える深い瞳と、感情の読み取りづらい抑揚の無い表情の持ち主。

間違いなく“伊佐木詩織”だった。

樹流都のクラスメートであり世界の終わりを予言した少女である。

詩織は読書をしていた。足下には様々な種類の本が散らばっている。

小説、難しそうな経済学の本、数学の参考書、語学の辞書、漫画、料理本、アイドルの写真集や小児用の絵本まであつて統一感が全く無い。

それと何故か部屋のあちこちには宝石や札束など金目のものが大量に散乱している。

神社の本堂で本と札束と宝石に囲まれた制服姿の少女……実にシユールな光景だった。

マモン

詩織は樹流都の声に気付いて顔を上げる。瞳を見開いた。

薄い単行本が彼女の手元から滑り落ちてゆく。ページを開いたまま落下し、床に当たって閉じた。

「アナタ相馬君なの？ どうしてここに……」

「伊佐木さん。捕まっているのは君だったのか」

互いの声が重なる。

「その体は一体どうしたの？」

詩織が樹流都に問う。

至極冷静な声色をしているが、それに反して彼女の視線は寸秒世話しなく動いた。

返り血で真っ青に染まった樹流都の全身を眺め、最後に彼の指先から伸びた異形の爪を見つめる。

樹流都は彼女の質問に答えたいのはやまやまであった。また逆に詩織からも話を聞きたい。

しかし今はそれどころではない。まずはこの空間から脱出するのが最優先だった。

部屋には悪魔の姿が見えない。彼女を連れて逃げ出すには絶好の機会と言える。

「話は全部後回しだ。行こう」

樹流都は詩織の元に駆け寄る。

「え」

「とにかくここから逃げるんだ」
彼女に手を差し出した。

だが詩織は床に座ったまま手を伸ばそうとしない。
首を小さく横に振り

「ごめんなさい。多分それは無理」
やや伏し目がちにそう言って救いを拒む。

意外な反応であった。樹流都は驚き、そして若干焦る。

「何故？」

脱出しようとしないう理由を彼女に問いかけた。

それはオレがいる限り誰もここから出れないからさ。
それは私がいる限り誰もここから出られないからです。

その時。

通路の奥から2種類の声が続けて聞こえてくる。

樹流都は素早く後ろを振り返った。

耳を澄ますと床の軋む音が緩徐なりズムで接近してくるのが分かる。
気のせいか肌を刺す不快な圧迫感も伝わってくる。

「相馬君、早くここから逃げて」

詩織が囁くような声で樹流都に退避を促した。向かってくる足音
の正体を知っている風な口ぶりだ。

樹流都はその場に留まって身動きしない。瞳を闇の奥に向けて密
かに心の中を臨戦態勢に移行した。

間もなく……それは彼らの前に姿を現した。

1つの体に左右2つの首を持った悪魔である。

頭は左右ともに鳥の形をしており瞳の中が鈍い黄金色に輝いている。背丈は190センチ前後。人間の全身に青黒い羽毛を貼り付けたような姿をしていた。

その奇異な容貌はロウソクの光が作り出す陰影によって余計に底気味悪さを増している。

悪魔は2人の前に姿を現すなり口を開いた。

「貴様、ニンゲンだな？」

2本並んだ首の内右側が樹流徒の素性を問う。ドスの利いた声をしていた。

「貴方はニンゲンですね？」

続けて左側の首が丁寧な言葉使いで右首と同じ台詞を繰り返す。こちらは高く滑らかな声をしている。

「相馬君。信じられないかも知れないけれど……その生き物は悪魔よ」

と詩織。

樹流徒はその言葉に相槌を打った。

「分かってる。こいつがマモンか」

「ほう。オレのことを知ってるのか？」

「私のことをご存知なのですか？」

マモンはまた左右の首で同じ台詞を1回ずつ唱える。そうしなければならぬのだろうか？聞き手と話し手双方に面倒そうな喋り方だ。

「そんなことよりお前は何故彼女を監禁している？」
彼はマモンの質問に質問で返す。

「シオリはニンゲンにしては珍しい力を感じる。だからオレのコレクションに加えたのさ」

と、右首。

「加えさせていただいたのです」
続けて左首。

「コレクションだと？」

樹流都は眉をひそめる。

「マモンは金目のものや珍しいものを収集するのが趣味なの。生き物も対象みたい」

と、詩織。

「そういうことか」

樹流都は彼女の説明に納得した。

床に散乱している札束や宝石もマモンが市内の何処かより盗んできた物だろうと推察する。

「魔界の連中からはよく“強欲なヤツ”と言われている。自覚は無いんだがな」

「自覚はございませんがね」

「それより伊佐木さんを返してもらえないか？」

樹流都は詩織の解放を要求する。

最も彼女は誰かの所有物ではない。本来こんな風をお願いするのも変な話であった。

するとマモンは左右の首を同時に激しく暴れさせる。怒り或いは拒否の意思を示す動きに見える。

「断る。シオリは返さない。ついでにオマエも帰さない。オレのコレクションに加えてやる」

「私のコレクションに加えて差し上げましょう」

言い終えたのと同時であった。

いきなりマモンの右首が炎を吐き出す。口の先から数メートル伸びる長い火柱だ。

詩織はあつと短い声を漏らす。

完全な不意打ち。しかし樹流徒は集中していた。

咄嗟に火柱をかくくぐるだけでなく、同時にマモンとの間合いを一気に詰める。

難なく懐に潜り込むと右首の喉元に爪を突き立てた。

彼の指先に確かな手応えが伝わる。

だが、感触が硬過ぎた。見れば爪の先はマモンの皮膚に阻まれて中まで通っていない。

すかさずマモンが反撃に移った。今度は左首がクチバシを上下に開いて白い煙を吐き出す。

樹流徒は正体不明の攻撃に一驚を喫してすぐさま飛び退いた。しかし煙の一部を右手の甲に浴びる。

その部位から焼けるような痛みが広がってきた。ただし熱ではない。冷気による痛みであった。

マモンは右首から火柱、左首から冷気を吐き出すことができる悪

魔らしい。

しかも羽毛の下に隠れた恐ろしく硬い皮膚によって全身を守られている。

交戦が始まって間もないが、樹流都は今対峙している敵を非常に厄介な相手だと判断した。

次の火柱が勢い良く伸びて彼を襲う。

樹流都は素早く床を転がって回避した。

その先に待ち伏せしていた冷気を足下に浴びながら立ち上がる。

今にも凍りつきそうな空気が靴や、制服の裾を通り抜けて彼のつま先と脛に張り付く。じんと痛みが広がった。

「ニンゲンにしてはなかなか良い動きをするじゃないか。ここまで辿り着いただけのことはある」

「辿り着いただけのことはありますね」

マモンは腕を組んで余裕を見せる。

「戦闘でニンゲンに遅れを取るなどありえない」とでも言いたげな態度だ。

バルバトスやコンビニで遭遇した悪魔にも少なからずその傾向は見られた。

ただ、その驕り^{おご}りは油断に繋がる。樹流徒にとっては有り難いだけだった。

「止めてマモン。相馬君も逃げて」

すると、ここで詩織がやや語気を強めて言い放つ。戦いを中断させようとした。

その言葉に返答は無い。睨み合う両者は互いに一步も引く気がなかった。

樹流徒が反撃の1手を打つ。爪が効かないのであれば火炎弾に頼るしかない。

彼は詩織を巻き添えにしないよう自分の立ち位置を調整しつつマモンに狙いを定めて炎を放った。

真紅の塊がマモンの左首めがけて飛ぶ。

これに反応したマモンは恐るべき速度で右首を伸ばした。攻撃を防御する。

火炎弾は悪魔の顔面を捉えて激しい火の粉を舞い上げた。

樹流都は固唾を飲んで攻撃の効果を確かめる。

「オレにこんなモノは効かん」

「私にこのようなものは効きませんよ」

悪魔が不敵な笑い声を重ねる。

炎はマモンの表皮をわずかに焦がすことしか出来ていなかった。効いていないというのは本当らしい。

樹流都は渋い表情になりかけたが、敵に心中を読み取られないようにするためポーカーフェイスを保つ。

劣勢

しかし心中を押し隠したところで、彼が手詰まりに陥ったことは違いなかった。

悪魔の能力が敵に通じないという状況は今回が初めてである。

他に使えそうな武器も所持していない。樹流都はあえて武器を調達しなかった。

悪魔の爪と火炎弾はそこら辺で簡単に手に入りそうな武器に比べれば威力において優秀だし、なにより道具と違って手放したり奪われたりする心配がないからである。

とにかく彼はもう他の攻撃手段を持っていない。マモンを打ち破るための牙がなかった。

当然ながら消極的な戦い方を余儀なくされる。

敵の攻撃を避けながら何とか勝つための方法を探すしかなかった。ただしそのようなものが見つかるかどうか怪しい。

右首から炎が噴出される。薄闇を明明と照らす真っ赤な光が樹流都に迫る。

彼は低い姿勢で駆けて、なんとかやり過ごす。

足を止めたところで今一度反撃を試みた。火炎弾を放つ。

マモンは攻撃を回避する素振りすら見せない。胸をいっぱい広げて炎の塊を受け止める。

無数の火の粉が弾けた。焦げた羽毛の下から皮膚の一部が僅かに覗

く。
しかし2本の首は同時に鼻を鳴らしてダメージが極めて軽微であることを主張する。

樹流都は、善戦することすら叶わない戦力差を敵との間に感じた。脳裏に敗走の2文字が過ぎる。いつになく弱気になった。

ここは一旦引くべきかも知れない。力をつけて再び戻って来た方が良いのではないか。
そう考えた途端、心は更に弱気な方へ傾いてゆく。

が、次に右首がクチバシを伸ばして樹流都の額を突き刺そうとした時。
それを紙一重で回避した彼は、不意に視界の隅に詩織の顔を捉え、はっとした。

今回彼女を助けなければ、再びマモンに挑むまでの間彼女が生きている保障などない。なまじ生きていたとして精神状態はどうなっているだろうか？

彼はそれに気付き、懸念した。簡単に逃げるわけにはいかなくなる。

片や精神論だけでは敵を倒せないという現実。
片やここで引くわけにはいかないという思い。

樹流都は葛藤する。このまま戦うべきか逃げるべきかで判断を迷う。少し前にも同じ葛藤を味わっているが当時と今とは状況が違う。

彼は逃げ回りながら詩織の姿をちらと見た。彼女を連れて逃げ出せないだろうかと考える。

だがマモンがそんな隙を与えてくれるハズが無い。諦念を抱く。

悪魔の攻撃は一向に休む気配を見せない。

樹流都は次々に襲い来る火柱、冷気、爪、そしてクチバシを、飛び跳ねたり転がりたりしてかわす。

その回避行動に相当な神経を費やさねばならず頭を働かせるのが難しい。

なにぶん狭い空間である。彼はほぼ常にマモンの攻撃範囲内に身を置いており、その中で逆転の一手を見つけ出すのは至難の業に近かった。

加えて時間が経過するにつれ彼の体にダメージが蓄積されてゆく。今のところ攻撃の直撃こそ避けてはいるものの完全にやり過ごせているわけでもなかった。

すでに小さな火傷と凍傷が体のあちこちを蝕んでいる。

局面は悪くなる一方だ。

「ニンゲンよ。分かてるだろうが逃げてるだけでは勝てんぞ」

「逃げているだけでは勝てませんよ」

マモンは一層余裕だった。

しばらく回避に専念している樹流都を見て、彼が他の攻撃手段を有していない事に気付き始めている様子である。

今度は左首から真っ白な冷気が放たれる。もう何発目か分からない。

すると、樹流徒は煙を避けながら敵の右側面に回り込む。素早く間合いを詰めた。

無謀だと知った上でマモンに攻撃を仕掛ける。敵に玩弄され続けることが癪だった。

接近に成功すると全力で腕を伸ばし敵の眼球を狙う。

爪の先が目標に到達するより早く、右首の瞼まぶたが閉じられる。

樹流都の指先に絶望的な感触が伝わってきた。

この悪魔は瞼の皮まで恐ろしく硬い。全くの無傷である。

マモンが無造作に手を振り払う。

爪が樹流都の皮を引き裂いた。咄嗟に体をよじった彼の左肩に赤く太い線を3本残す。

樹流都は傷口を抑えながら床を転がった。

その先にはダイヤの指輪やプラチナのネックレスなど、美しい装飾品が大小合わせて5、6点散らばっている。

彼はその中から指輪を掴んで敵に投げつけた。今度は完全に苦し紛れの行為である。

指輪は左首の額に跳ね返って床を転々とする。それだけだった。

詩織は表情を微動させ胸の前で拳を軽く握り締める。

一見、樹流都には勝ち目など欠片も残されていない。この場に入がいれば10人中9人以上は彼の敗北を確信しただろう。それだけ一方的な展開だ。

ところが、樹流都が苦し紛れに取った行動は、彼に意外な気付きをもたらしていた。

先程マモンが見せた行動に違和感を覚えたのである。

それは彼が最初の火炎弾を放った時……

炎の塊は左首に向かって飛んだ。それに対してマモンは凄まじい反

応速度で右首を防御に回した。
樹流都には今になってあの動きが不自然に思えてならなかった。

考えてもみればわざわざ右首が急いで左首の前に飛び出してくる必要は無い。指輪を投げた時と同じように左首が火炎弾も受け止めれば良かったはずだ。

もしかしてあの時右首は左首をかばったんじゃないだろうか？樹流都の直感がそう告げる。

これが憶測に留まらないとしたら、右首が左首の盾になった理由など1つしかなかった。

火炎弾は右首には通じなくても左首に対しては有効。
そうとしか考えられない。

葛藤と焦燥に首を締め付けられていた樹流徒の瞳に幽かすかな光が宿る。

ここで彼は1つの“策”を思いついた。あわよくばマモンに一泡吹かせることができるかもしれない。

ただしその策には相打ち狙いが含まれている。成否に関わらず手痛い反撃を受けることが決まっていた。

加えて必ずしも上手くいくとは限らない。策などという上等なものではなく博打と呼ぶに相応しいかも知れない。
実行するのが躊躇ためらわれる。

しかし他に手など無かった。

樹流徒は胸の奥から湧き上がる恐怖を懸命に押さえつける。

この決意が崩れてしまわぬ内に、そしてこの決意が敵に悟られる

前に、マモンめがけ真正面から飛び込んだ。
今度は無謀ではなく、敢然と立ち向かってゆく。

命を賭けて

右首が迎撃の炎を吹く。

樹流徒は紙一重で避けると見せかけて左首への最短距離を行った。炎の端が頬や肩に触れる。耳元でチリチリと服、皮膚の焼ける音がした。

それでも構わずに飛び込んで、神経が脳に痛みを伝えてきた頃には左首にしがみついていた。

マモンはこの時点で樹流都が相打ち狙いを仕掛けてきたことに気付く。両手の指を揃え、1列に並んだ4本の爪をがら空きになった彼の脇腹に突き刺した。

同時に樹流徒の口から火炎弾が放たれる。

左首の至近距離から撃ち込んだ一撃。これを右首が防ぐことは不可能だった。それを狙つての相打ちである。

左首がギャツと短く甲高い奇声を発した。樹流都と詩織の耳を劈く。

黒ずんだ煙が少量立ち込める中、左首はクチバシから上が全て吹き飛んでいた。残された部分も叫び声を上げたのを最後にびくりとも動かなくなる。

樹流都の勘は正しかった。左首に対して火炎弾は有効。しかも見限り絶大なダメージを与えている。

だがマモンは左首を失いながらもまだ動く。痛み悶える様子も無い。

「ニンゲンの分際でやってくれたな！」

右首がどこかで聞いたような台詞を吐く。

頭部を小刻みに震わせ激昂していた。あれだけ見せつけていた余裕を完全に失っている。

爪先で樹流徒の胸板を力いっぱい蹴り飛ばした。

樹流都は後方へ軽く吹き飛ぶ。受身も取らず床に尻を着いてそのまま仰向けに倒れた。

彼の脳内で、マモンが片首を失ってなお生きているという展開は織り込み済みであった。

しかし相打ちの時に受けた傷が予想以上に深い。えぐられた両脇腹が痛くて動けなかった。

真っ白なシャツに赤黒い染みが広がってゆく。同色の液体が床にまで漏れ出す。

虫の息となった彼にとどめを刺すべく悪魔がひたひたと迫る。

鼻から出入りする息は荒々しく、白目の中は雷の如く血走っていた。

樹流都は傷の痛みを堪えるのに精一杯で敵の接近に気付きながらも身動きが取れない。

すると、ここで突として詩織が動き出す。

彼女は素早く辺りを見回して足下に置かれた分厚い辞書に目を留めた。それを両手に持って立ち上がる。

マモンのすぐ後ろまで駆けると、尻込みすることなく右首の後頭部めがけ思い切り辞書を投げつけた。

ケースに収まった辞書は形状を保ったまま直線に近い放物線を描く。しかし詩織の腕力では狙った位置まで届かなかった。武器は標的の頭部ではなく肩にぶつかって虚しく落下する。

マモンは全く意に介さない。立ち止まったり振り返ったりするなどの挙動を一切見せなかった。

詩織は即刻次の行動に移る。

今度はマモンの胴体に体当たりをしてしがみつく。悪魔の前進を食い止めようとした。

するとマモンが自ら歩みを止める。右首が頭を捻って恐ろしい目つきで彼女を見下ろした。

「邪魔だ」と声を張り上げて暴れ馬のように全身を揺らし、飛ぶ。

詩織の足は軽々と地から離れ上下左右に振り回された。

その状態で数秒の間粘ったが、すぐ限界が訪れる。

宙に放り出された彼女の体は派手に床を転がってゆく。壁に肩を強か打って止まった。

マモンはクチバシから深い息を吐くと、再び樹流都の方に見返る。

深手を負って仰向けに倒れていた樹流徒は、詩織が奮闘している間にようやく首だけを起こすことができた。

マモンの状態を確認する。

彼は、固く結んだ口の端を微かに持ち上げた。そうせずにはいられなかった。

左首が光の粒となって空中を漂い始めているからである。

光の粒は樹流都の体に引き寄せられ吸収されてゆく。傷が癒え力が沸き起こる。

ただし左首のみを吸収したせいかわけが完治しない。火傷や凍傷は残り、肩の爪痕やえぐられた脇腹の傷も塞がりきっていない。

樹流徒がなんとか立ち上げられる状態まで持ち直した程度である。

「オマエは生かしておかない。死体をコレクションに加えてやる」
右首が狂気じみた声を震わせる。しかしその台詞を復唱する口はもう存在しない。

樹流徒は敵の正面に立つ。生死を賭けた博打はまだ終わっていない。これから最後の勝負に臨む。

一方、マモンは左首を失うという大きな痛手を負ったものの、残された右首や胴体には爪も火炎弾も通用しない。故に今後樹流都が繰り出す攻撃を全く恐れる必要がなかった。

そこに油断が生まれる。

樹流徒が口を開く。

マモンは火炎弾が飛んでくるものだと思っていていない。両腕を広げて攻撃を受け止めようとしている。

直後の反撃で樹流都に死の一撃を与えるつもりなのだろう。怒りと強気に満ちた瞳が全てを物語っていた。

しかしそのあと瞬きをする間もなく、マモンにとって信じられないことが起こる。

樹流徒から放たれたものは火炎弾ではなく白い煙だった。彼が左首を吸収したことによって使用可能になった冷気である。

攻撃を避ける気など微塵もなかったマモンはそれをまともに浴びた。

悪魔の体に跳ね返った冷気の粒子がひらひらと舞い降りてゆく。その中に立つマモンの容貌は一目で分かるほど変化していた。あれだけ鉄壁の防御を誇った皮膚がまるで萎びた草花しなみたいになっている。放っておいても重力で千切れてしまいそうだった。ほぼ全身が微動だにしない。唯一手の指先だけが小刻みに震えていた。頭部は目とクチバシをいっぱいに広げ驚きを露にしたまま硬直している。

左首に対する火炎弾に続いて今度も樹流徒の期待を上回る効果だった。マモンは左首が炎に弱く、それ以外の部位は冷気に弱いらしい。

樹流都が相打ち狙いでマモンの至近距離まで迫った時、左首は冷気で迎撃しようとはしなかった。あれはマモン自身が巻き添えになるのを恐れたからに違いない。

樹流都が爪をなぎ払うと今度は攻撃がいとも簡単に通じた。切断された右首が声も上げず床に落ちる。ポトリと淡白な音を立てた。詩織は顔を背ける。

間もなくマモンの全身が崩れ光の粒に変わってゆく。今まで樹流都が倒してきた悪魔たちより粒の量がやや多い。

勝利の瞬間だった。

樹流徒は胸を撫で下ろす。両肩から一気に力が抜けてゆく。

全く勝ち目の計算できない賭けだった。

果たして本当にマモンの左首に火炎弾は効くのか？効いたとしてもどれだけの威力を発揮するのか？

相打ちの際、致命傷を受けたらどうする？
左首から入手した冷気は効果があるのか？

不安材料だらけだった。

樹流都は、それらの賭けに負けていた場合今頃自分がどうなっていたかを想像する。

床に広がる己の血が目に入って寒い気分になった。

厳密に言えば、彼は賭けそのものには負けていたと言える。

もし詩織が行動を起こしていなければ、樹流都はマモンの左首を吸収する前にとどめを刺されていただろう。

相打ちの時に受けた脇腹の傷は実質致命傷だった。

「相馬君。アナタは……」

詩織が樹流徒に声をかける。

その途中。

突然、2人のいる部屋が鳴動する。

樹流徒はバランスを崩して床に膝を着く。詩織も座ったまま両手を着いた。

マモンの死に合わせるかのように空間が崩壊を始めてゆく。

あっという間に廊下の天井が崩れた。出口を塞がれる。2人は狭い一室に閉じ込められた。

何もできずに焦っていると、突如マモンが最期を迎えた位置から謎の白い光が現れる。

光はゆっくりと膨らんでゆく。部屋全体を飲み込んで目を開けて

いられないほどの輝きを放つ。

数秒後。

樹流都が瞼を開くと、そこにはもう不思議な空間は存在しなかった。天井の崩壊により塞がってしまった廊下も、部屋の四隅に立てられていたはずのロウソクもどこかへ消えてしまっている。

本殿はいつの間にか元の姿を取り戻していた。

樹流都が振り返ると出入り口の扉から水色の光が射し込んでいる。境内の様子が見えた。

彼は寸刻ぼうつと外の景色に見入った後、安堵した。ひとつの戦いが終わったことを今度こそ実感する。

経緯

「伊佐木さん。大丈夫か？」

樹流都は、床に座り込んだままの詩織に歩み寄る。手を差し出すと彼女はそれを掴み、立ち上がった。

「ありがとう。アナタこそ傷は大丈夫？」

「ああ」

樹流都は首肯する。

本当は体のあちこちに痛みが残っていた。幸い出血は殆ど止まっていたらしく、酷く痛む箇所も無いので普通に体を動かす分には問題はなさそうだ。

しかしながらマモンを全て吸収したはずなのに傷が完治していない。これはどうということなのか？

樹流都が推察するに、悪魔を吸収して傷を癒す能力は万能ではない。深い傷や多くの傷を負ってしまった場合、悪魔を1体吸収したくらいでは回復量が追いつかないらしい。

このことは今後のために覚えておく必要があるそうだったが、彼は、できればその知識が役立つような場面が訪れないことを期待する。

「ところで相馬君、その体はどうしたの？」

詩織は改めて問う。

樹流都はマモンと戦う中で常人を逸する身体能力・その他諸々を見せた。それを間近で目撃していた彼女が余計気になるのは当然であ

る。

樹流都としても別に隠し立てするつもりはない。むしろ他者に自分の体のことを知ってもらうことで心の内に押し込んだ不安も幾らか紛れそうな気がした。

「この体については自分でも良く分かっていないんだ」

「分からない？」

「実は……」

樹流徒は彼女の質問に答えるついでにこれまで自分が体験してきたことを話すことにした。

図書室で詩織と別れ、その後帰宅する途中上空に魔法陣が出現して黒い光が降り注いだこと。

目を覚ました時市内は酷い有様になっていたこと。

謎の男・南方との出会い。彼から聞いた悪魔、魔界、魔都生誕、そして結界の話。

悪魔との初遭遇に初戦闘。

倒した悪魔を吸収してしまい、その後自身の体に異変が起きたこと。バルバトスとの出会い。彼が運営している悪魔倶楽部の存在。

コンビニでの戦闘。

そしてアンドラスからマモンの情報を得たこと。

全てを事細かに詩織へ伝えてゆく。

「そうだったの。そんなに大変なことがあったのね」

話を聞き終えた詩織は小さく頷いた。

彼女は驚いたり、また話の内容に疑念を兆す素振りは見せず、時折相槌を交えながらじつと樹流都の言葉に耳を傾けていた。彼の体について一応の納得はしたようである。

「それにしてもマモンに捕まっているのが君だと分かった時は驚いた」

「ええ。私もアナタが現れた時には驚いた」

「伊佐木さんはあの後どうしてた？」

今度は樹流徒が質問をする。彼女がマモンに捕まるまでの経緯を尋ねた。

「私も黒い光を浴びて気を失っていたの。場所は校門のすぐ前」

「じゃあ僕達が図書室で別れた後、君はまだ校内にいたんだな」

「ええ。次に目を覚ました時、私もアナタと同じように酷い光景を見たの。人や動物は倒れ空は水色に覆い尽くされている光景。最も私は未来予知で既にそれを見ていたから余り驚くことはできなかったけれど」

「未来予知か。その話も今なら信じられる」

「でも絶望的な気分になったわ。私は自分も死ぬものだと思っていたから」

「ああ。分かるよ」

樹流都は、自分が覚醒した直後に味わった圧倒的な孤独感を思い出して、彼女に同調する。

何故自分達だけが生き残っているのかは今になっても大きな疑問だった。

詩織は話を続ける。

「私が目を覚ましたのは気絶してから6時間後くらいだった。携帯で時間を確認したのだけれど」

「なら僕が起きた4時間後だな。それで？」

「周りに生きている人はいなかったから、他の生存者に会うため移動することにしたの」

「家族の安否は？」

尋ねると、ここまで淀みなく答えていた彼女が急に黙り込む。無言で床の一点を見つめ

「家族の無事は確認しようと思わなかった」
変わらぬ口調で答える。

樹流都はこの話を掘り下げ気は無かった。「そうなんだ」とだけ返す。

「それから私は移動を始めてすぐにマモンと遭遇してしまっ……」
「この神社に連れてこられたんだな？」

「ええ。1度だけ自力で脱出しようとしてみたけれど無理だった」
「悪魔相手じゃ仕方ないよ」

「アナタが来なかつたら私はマモンの私物として一生を終えていたかも知れないのね」

「……」
「だから、少しお礼を言うのが遅れてしまったけれど……助けてくれてありがとう」

「いや。別に」

今度は樹流都が床に視線を移す。他者からの素直な感謝というものに対して余り免疫がなかった。

「ところでアナタは今後どうするの？」

詩織が話題を“今まで”から“これから”に切り替える。樹流都の答えは既に決まっていた。

「引き続き魔都生誕の真相を探るつもりだ。君は？」

「本当なら相馬君に協力したいけれど、私には悪魔と戦う力もないし足手まといになってしまっただけだから」

「……」

「私はこれからどこかに身を潜める事にする」

「身を潜める？どこに？」

「市内のどこか」としか言えない。まだ決めてないもの」

「そうか」

「アナタから聞いた話によると、私達は結界という壁に閉じ込められて市外には出られないのでしょうか？」

「ああ。完全に封鎖されたと断言はできないけど、でも……」

樹流都が全てを言い終える前であった。

特にきつかけも無く、彼の頭に突然ある妙案が浮かんでくる。

詩織の安全を確保できるかもしれない場所がひとつだけ見つかった。

「そうだ伊佐木さん。悪魔倶楽部へ行かないか？」

樹流都はすぐさま、その思い付きを彼女に話す。

「え」

流石に突飛だったか、詩織は2度瞬きをした。

「さつき話した悪魔の店だ。そこで君を一時的に保護してもらう」

「それはつまり、悪魔が集まる場所で悪魔から身を守ってもらうということ？」

「変な話だけどそういうことになる。店主が了解してくれるかどうか分からないが」

名案とは言えないのかも知れない。だが選択肢の1つとしてバルバトスに話を聞いてもらう価値はありそうだった。上手くいけば今後詩織は現世を徘徊する悪魔に怯える必要がなくなる。

一方、この提案を聞いた詩織は沈黙する。困惑している風ではない。冷静かつ慎重な態度だった。

彼女は樹流都の口元に視線を置いたまま少しの間考え込んで……

「ごめんなさい。今は決められない」

直答を避けた。

「余り気が進まない？」

「そういうわけじゃないけれど、もしよければバルバトスという悪魔に会って、店内の様子を自分の目で見た後に判断したいの。その……わがままかも知れないけれど」

「いや。別にわがままじゃないよ」

詩織の言い分は最もに聞こえて、樹流都は首を縦に振る。

考えてもみれば、現段階で彼女を悪魔倶楽部へ避難させようとすることは、彼女に「見ず知らずの悪魔と一緒に過ごしてくれ」と言っているのと同じである。

身の安全を確保するためとはいえ詩織が躊躇ためらうのは当然だった。彼女じゃなくとも一般的な感性の持ち主なら即決は難しいだろう。

樹流都はそのことに気付いた。少々強引だったかも知れないと考えを改める。

それでも詩織は彼の意見に反対したわけではない。これから2人で悪魔倶楽部へ行くことは決定した。

交換条件

その空間に1歩足を踏み入れた途端、現世よりも少し冷えた空気が2人の肌を伝った。

初めて悪魔倶楽部を訪れた詩織は入り口の前で立ち止まったまま動かない。瞳を緩やかに動かして、独特な雰囲気を放つ店内を見渡した。

「相馬君の話の疑っていたわけではないけれど、本当にこんな場所があるのね」

そう語る彼女の表情は、樹流都から見て心なしか生き生きしていた。別に喜んでいられるわけではなく好奇心を強く刺激されているように見える。

彼女がマモンから解放され自由の身となってからまだ1時間と経っていないが、その余韻もすっかり醒めてしまったようだ。

現在店内に客はいない。パズとアンドラスは去り、彼らが食事をしていたテーブルの上は綺麗に片付けられていた。客席上で揺らめいていたキャンドルの炎も消え、辺りの明度は少々落ちていく。

バルバトスは1人（厳密には1体）カウンターの奥で新たな客の来店を待っていた。

腕を組んだまま仁王立ちし、大きな像みたいに固まっている。傍目には完全に暇を持て余している店主だった。

樹流都は、店内の様子をざっと把握した詩織に「行くのか」と声をかける。彼女が黙諾し、2人は入り口の前から歩き出した。揃ってバルバトスの元へ向かう。

客席を横切ると、テーブルの下で寝そべっていた灰猫・グリマルキンが、樹流都たちの足音に驚いて飛び出した。

グリマルキンは素早く別の客席の陰に滑り込むと椅子の上に跳躍する。それから尻尾を垂直に逆立てた。威嚇をしているようだ。

詩織はそれを見て優しげな笑みをグリマルキンへ向けた。隣にいる樹流都が見逃すほど一瞬の微笑だった。

2人はカウンターを挟んでバルバトスの前に立つ。

彼の背後に見える扉から微かな物音が漏れてくる。前に樹流都が聞いたことがある音だ。店員が厨房で忙しく動き回っているのかも知れない。

「キルトか。ようこそアクマクラブへ」

バルバトスは腕組みを解いて樹流都に声をかけた。退屈が解消されたと見えて心持ち嬉しそうである。

「ああ。また来た。少し話をしてもいいか？」

「構わないが後ろのニンゲンは誰だ？」

挨拶も早々、バルバトスは詩織の顔へ視線を送る。

彼女は1歩前に出てから

「私は伊佐木詩織。アナタの名前は相馬君から聞いています。バルバトスさん」

落ち着いた口調で名乗った。

「イサキシオリか」

「詩織でいいです」

「そうか。シオリはキルトの仲間なのか？」

「ああ」

樹流都が小さく頷く。

詩織とはまだ仲間と呼べるほどの関係かどうか分からない。

だが早く本題に入りたいので、彼女との正確な関係をバルバトスに説明する手間を嫌った。

適当に返事をして、例の話を持ちかける。

「それより、実はお前に頼みがある」

「む。頼みだと？」

バルバトスは微かに瞼を下げる。少し怪訝っぽい表情をした。

「無理を承知で頼む。しばらく彼女をこの店で預かって欲しい」

「ほう。何故だ？」

「彼女の安全を確保したい。現世には人間を敵視する悪魔も徘徊しているから危険なんだ」

「なるほど。そういうことか」

お互い間を置かずに言葉を交わす。不自然なまでに円滑な会話だった。

その原因は樹流都の唐突な要求に対して全く驚きを見せないバルバトスにある。彼個人の性格なのかそれとも悪魔という種族が持つ気質のためなのかは分からなかった。

最も、樹流都としてはそれに期待しているのだった。ここが現世だったら今回みたいな要求は常識的に考えてまず聞き入れられない。しかし魔界の場合だったらどうかという期待である。

「オマエの話は分かった。だがシオリ自身はそれを望んでいるのか？」

バルバトスは真紅に燃える虹彩を再び彼女に向けた。

「ああ。それは……」

樹流都が事情を説明しようとする

「私やるわ。お願いします」

詩織の声が彼の言葉を遮る。

彼女は、樹流都とバルバトスが質疑応答をしている短い時間の内に意を決していた。

その余りの潔さに、樹流都は若干の驚きを感じる。

「そうか。さて。どうするか……」

するとバルバトスは両目を伏せた。顎に手を添えて一考する。

樹流都は密かに安堵した。今回の話を即座に断られる可能性も視野に入れていたため、こうして検討してもらえただけでも多少の手ごたえを感じた。

一方、詩織の表情は変わらず。当事者でありながら極めて落ち着いた態度を保つ。だがその心内がどうなっているかは本人のみぞ知るところであった。

それからバルバトスが2人の視線を受けながら思考を続けること数十秒。

彼は瞼を持ち上げ、顎に当てていた手を腰に移す。そしてすぐに口を開いた。

「いいだろう。それならば“交換条件”をしないか？」

それがバルバトスの回答であった。

「交換条件？」

樹流都が鸚鵡返しに尋ねる。

「そつだ。シオリにこの店で働いてもらう」

「私がここで？」

詩織は呟くみたいに驚きの声をあげる。我知らず樹流都と視線を合わせた。

「働くといっても、具体的には何を？」

樹流都が問う。

「酒や料理を運び皿を洗って貰う。他にも色々だ。危険な仕事は無いから安心するといい」

「そうですか」

詩織は納得した様子で點頭する。

「どうする伊佐木さん？少し考える時間を貰った方が良くないか？」

ここで、樹流都が詩織の意思を確認し、同時に熟考を促す。

彼女が下す決断に反対する気は全く無いが、早計になってしまふことを懸念した。

対して詩織は短い振幅で首を左右に振る。

「ありがとう。でも私、バルバトスさんの話を受けることにする」

彼女は再び即断した。

それを見て、バルバトスは突然口を結んだまま肩を小さく揺らす。笑っていた。

「面白い。シオリもキルトとはまた違った意味で興味深いヤツだ」

そう言つて、今一度詩織の顔を見据える。彼女に対し少なからず好印象を持ったようだった。

「伊佐木さんもバルバトスも本当にいいんだな？」

樹流都は2人の顔を交互に見て念を押す。最後の確認を取った。

「ええ。もう決めたから」

詩織が首肯する。

「オレも構わない。これで我がアクマクラブは“魔界史上初めて二ンゲンが働いた店”として名を刻む事になるだろう」
続いてバルバトス。

「そうか」

樹流都も納得することにした。

話がとんとん拍子に進んで何だか肩透かしを食らったような気分になったが、当面のあいだ詩織の安全が保障されたことを思えば、全く悪い気はしない。

樹流都は、今回の要求をバルバトスに却下された場合、今後詩織と行動を共しようとして決めていた。

彼女の護衛と魔都生誕の真相解明を両立させるつもりであった。

しかし果たして本当に襲い来る悪魔から自分と詩織、2人分の命を守り切ることができだろうか？マモンという強敵と戦った後で、彼は絶対の自信を持つ事はできなかった。

それだけに、今回の決定は少なくとも自分にとっては良かったよ
うな気がする。それが樹流都の紛れも無い本音だった。

「ではシオリよ。この店で働く準備が出来たらオレに声をかける」

「はい」

「それからオマエにも後で店の鍵を作つてやる。使い方はキルトに
教えてもらえ」

「分かったわ。ありがとうバルバトスさん」

詩織とバルバトスは早くも互いに流暢な話し振りを見せる。
反りが合うのだろうか？既に何年来の知り合いみたいだった。

「じゃあ伊佐木さん。今から一度ここを出ないか？」

頃合を見計らって樹流都が詩織に声をかける。

現世への一時帰還を提案した。

「何故？」

「現世からこつちに持ち運びたい物が色々あるんじゃないかと思っ
て。よければ自宅まで送るよ」

「そう……。確かにそうね。それじゃお願いしてもいい？」

「ああ」

生存者たち

見覚えのある弓なりの道。土手の片側から見える緩やかな川の流
れ。
その場所を、現世に帰還してきた2人が横並びになって歩いていた。
向かう先は詩織の自宅。

周囲に悪魔の姿は見えない。
それでも樹流都は最低限の警戒を怠らなかつた。薄い霧が漂う中、
時折、辺りを見回し耳を澄ませる。
敵の急襲に備えた。

一方、詩織は平静を装っているものの足取りは重い。マモンに囚
われていた間に心身をかなり消耗していたようだ。先程までそのよ
うな素振りは全く見せなかつたが、無理をしていたのだろう。

そんな彼女の不調に樹流都が気付くまでそれほど時間はかからな
かつた。

「伊佐木さん。少し休んだ方が良くないか？」

彼は休憩を勧める。

まだ摩蘇神社から全然離れていない。このまま歩き続けたところで
いずれ詩織の体力が底を着くのは目に見えていた。

もし彼女に限界が訪れた時、運悪く同時に悪魔の襲撃を受けよう
ものならば最悪の状況としか言えない。

実際有り得るだけに、樹流都はできれば彼女に休んでおいて欲しか

った。

それでも詩織は肯んじない。ただ「大丈夫」とだけ答える。樹流都に遠慮しているのか、それとも他に何か理由があるのか、休もうとしない。足を止めようとする。

結局、樹流都は彼女の強い意志を尊重した。「余り無理はするなよ」と言葉をかけるに留める。

それから数分の間黙々と歩き続けた。

2人の間を北寄りの風が吹き抜ける。細長い枯れ草が地面を這って彼らの前を横切り、舞った。

この冷風は結界の向こうからやってきたのだろう。龍城寺市の外が現在どうなっているのかを知っている風だ。

詩織は「世界は滅びる」と予言していた。片や、南方という男は「被害に遭ったのは魔法陣が広がった範囲までだと思っ」と曖昧な事を言っていた。

果たしてどちらが正しいのか、現在においても全くの不明である。

ここで、詩織が前触れもなく樹流都に話しかける。

「相馬君。少し話をしない？喋りながら歩くと気が紛れるから」

2人で悪魔倶楽部を出て以降、彼女の方から口を開くのはこれが初めてだった。

不意の出来事に、樹流都は反射的に頷く。

直後、困った。漠然と“話をしよう”などと言われても一体何を喋ったら良いのか分からない。

彼が数秒黙っていると、詩織の方から話を振る。

「ね。悪魔倶楽部の鍵ってどうやって使うの？」

「ああ……。現世から店に移動する時は鍵を鏡かガラスに挿し込むんだ。逆に店から出る場合は扉の先にある空間に挿す」

「そうなの。でもどうして鏡とガラス限定なの？鉄板では駄目なの？」

「さあ。考えてもみなかった。バルバトスに聞いてみないと分からない」

樹流都はそう答えてから

「ところで、次はどこで鍵を使う？」

逆に詩織へ質問する。

「そうね。別にどこでもいいけれど」

「荷物を運ぶことを考慮すると、なるべく君の自宅から近い方がいいかも知れないな。荷の重さと量にもよるが」

「じゃあ図書館の中なんてどう？本も借りられるし」

詩織は殆ど考える時間を置かずに答えた。

市内には“龍城寺中央図書館”という大きな図書館がある。

そこは、樹流都たちが通う学校の廊下から見える場所に建っていた。詩織の家もそこから近いらしい。

「読書、好きなの？」

「ええ。本好きを自称するのは抵抗があるけれど」

「そう」

「捕まっていた時、マモンに“何か欲しいものはあるか？”って聞かれたの。私は“本”と答えたのだけど……。その程度には好き」

「そうか。神社にあった本はマモンが君に差し入れた物だったのか」

「ええ。でもマモンは私がどんな本を好むか知らなかったせいで色

々持ってきてしまったけれどね」

「確かに辞書とか絵本とか統一感がなかったな」

「ちなみに私、最初は本ではなく“自由が欲しい”って言ったの。でもそれは却下されたわ」

「だろうな」

樹流都は、当時詩織とマモンがそのようなやり取りをしていた場面を想像して、妙におかしくなった。

それから話を元に戻す。

「鍵を使う場所、図書館で良いと思うよ」

樹流都は快く彼女の意見に賛成した。特別異論を唱える理由も見つからなかった。

「そう。ありがとう」

詩織は道の先を見つめたまま静かに礼を述べる。

数歩進み、樹流都はふと、図書館という単語から図書室を連想した。

魔都生誕が起こる前、詩織と学校の図書室で会っていた時の事を思い出す。

「そつだ伊佐木さん。急に話は変わるけれど」

「なに？」

「あの時、君はどうして僕を図書室に誘った？何故僕だったんだ」
樹流都が問う。

彼はこれと同じ質問を図書室でもしていた。当時、詩織は回答を避けている。

「そつね。今なら信じてもらえそつだから聞いてくれる？」

「ああ。聞きたい」

樹流都が答えると、詩織は黙諾した。視線を遠い空に投げて徐に話し始める。

「私が相馬君を図書室に呼んだ理由は、未来予知で見た映像の中にアナタの姿を見たからなの」

「僕を？」

「そう」

「つまり、君が予知した未来に偶然僕が映ってたということ？」

「ええ。確か、場所はどこかの交差点。大勢の人々が倒れている中アナタ1人だけが立ち尽くし、呆然としていた」

それは気絶していた樹流都が目を覚ました直後の状況に相違なかった。場所が交差点であることもピタリ一致している。

「なるほど。確かに今だからこそ君の言葉が本当だと信じられる」

樹流都は得心して相槌を打つ。

仮にこの話を図書室で会った時に聞かされていたとしても、間違いないと信じることはできなかった。

「あの時、相馬君に未来の出来事を伝えて何かが変わるわけではないことは分かっていた」

「……」

「私の話を信じてもらえないことも分かっていた。それでも伝えておきたかったの」

「だから君は僕にだけあの予言を聞かせてくれたんだな」

「アナタにだけ？」

「え」

「……」

短い沈黙の後。樹流都はギクリとした。

「僕だけじゃないのか？」

思わずその場に足を止める。合わせて詩織も立ち止まった。

「ええ。相馬君に図書室へ来てもらったのは放課後だけれど、私は昼休みにも別の人と会っていたから」

彼女はさらりと告げる。

樹流都にとっては軽く衝撃的な事実だった。自分以外に詩織と会った人物がいる。初耳だった。

詩織と会っていたということは、その人物も彼女の未来予知に映ったのだろう。

言い換えれば、その人物も魔都生誕以降生きていることになる。今も生きているかも知れない。

「一体誰と会ってたんだ？」

当然、樹流都は尋ねる。

「籠地君」
かじち

詩織はその名を口にした。

瞬間、樹流徒は口を僅かに開けたまま黙った。衝撃の連続に言葉を失う。

彼は、今詩織が口にした籠地という人物のフルネームを知っていた。

“籠地明治”。

樹流徒の親友・メイジである。

「君はメイジとも会ってたのか？」

樹流都は詩織に1歩詰め寄る。

「私が見た未来の映像には彼も映っていたから」

「映像の内容は？アイツはどんな状態だった？」

「私が見たのは籠地君が交差点から立ち去ろうとする瞬間。その時アナタはまだ彼の足下で倒れていたわ」

樹流都は当時の状況を回想してみる。

確かに、自分が目を覚ました時にはすでにメイジの姿がなかったことを思い出した。

「ごめんなさい。別に隠していたわけではないのだけれど」

「いや。それはいいよ。それよりも、メイジのやつ生きてたのか」

「ええ。少なくとも黒い光を浴びても死ななかったことは確かね」

先程より強い木枯らしが2人の隙間を縫って走り去る。

詩織の髪が南に攫さらわれてゆく。彼女はそれをそっと片手で押さえた。

「メイジが生きているかも知れない……」

樹流都は思わず両の拳を握り締める。胸の内に抑え難い希望が充ちてゆくのを感じた。

だが同時に不安も覚える。現在市内には悪魔が徘徊しており、非常に危険な状況だ。そんな中メイジがまだ無事にいるという保障はない。

彼は、親友の存命を強く願った。

伊佐木家にて

中高層のマンションやオフィスビルが狭い範囲で密集し、皆で背比べをしている。都会の典型的なイメージを現したような景色が広がっていた。

市内でも比較的富裕層の人々が暮らす地域である。

その中に、ある10階建てのマンションがひっそりと建っている。本来10階建てといえはひっそりという表現は似合わない高さだが、すぐ近くに複数のタワーマンションがそびえ立っているため相対的に控えめな大きさに見えるのだった。

マンションは敷地が狭い歩道に面しており、外壁の色はスカイグレイ。エントランス前に小さな植樹が2本、門番のように入り口の両脇を固めている。

詩織の自宅、即ち伊佐木家はこの建物の7階に入っていた。

悪魔倶楽部を出てから一体何時間歩いただろうか。

樹流都は驚いていた。詩織が休憩らしい休憩も挟むことなくとうとうここまで来てしまったことに対し敬服していた。彼女は一度も弱音を吐くことなく歩を運び続けたのである。

何が詩織をそこまで駆り立てたのか、樹流都には知る由も無い。特に大した理由など無かったのかも知れない。

ただ、彼女の精神的な強さには目を見張るところがあった。マモンに対し臆することなく立ち向かっていった件、バルバトスを前に

物怖じせずしかも店で働く事を即断してしまった件もある。

ところで、2人はここへ辿り着くまでの間に何度か悪魔の襲撃を受けていた。

襲ってきた悪魔は殆どが小人型の群れだったが、火炎弾を吐き出す悪魔の同種とも計2体、交戦した。

樹流都は彼らを全て撃退し、幸い詩織には指一本触れさせずに済んだ。

またそれ以外の悪魔に対しては逃げ隠れしながら上手くやり過ごすことができた。悪魔の方が2人の存在を意に介さなかったケースもある。

ともあれ2人は無事目的地の前に立つ事ができた。

残すは7階までの移動のみ。現在電気が通っていないためエレベーターを利用する事ができない。階段を使うしかなかった。

詩織は壁に手を着きながら1段1段踏みしめるように上ってゆく。

「肩、貸そうか？」

樹流都が問うと、彼女は首を左右に振る。最早その動作すら辛そうだ。

3階へ続く階段の途中。

「はっ」

樹流都が短い声を上げた。詩織の腕を掴んで2人その場にしゃがみ込む。

視界に突然謎の飛行体が映ったために取った行動だった。今、この市内で空を飛ぶ物体といえば悪魔しかいない。

息を殺して様子を窺っていると、背中に大きな翼を生やした人型の生物が1体、高速で上空を横切つてゆく。

2人は恐怖が過ぎ去るまで階段の陰に隠れてやり過ごす事にした。

悪魔は彼らの存在を捕捉することなくどこかを目指して飛び去つてゆく。或いは2人の存在に気付いた上で見逃したのかも知れない。いずれにせよ2人が助かった事には違いなかった。

樹流都は浅い息を吐く。悪魔の陰影が空から完全に消え去ったのを確認してから、詩織の手を引いた。

再び伊佐木家の部屋を目指し階段を上り始める。

そして7階。

通常、1階からここまで辿り着くのによつくり階段を上つても3分あれば十分だが、樹流都たちはそこその時間を要した。

詩織にとっては気の遠くなるような時間だったかも知れない。それでも彼女は遂に最後まで樹流都の助けを借りようとはしなかった。

相変わらず辺りはしんとしている。2人だけを残して全ての時間が静止していた。

白っぽい灰色の廊下は水色の光と薄い影に彩られ、まるで美しい湖の底に沈んだ遺跡の中にいるような錯覚を樹流都たちに与える。

エレベーターはこの階で止まっていた。扉が開きっぱなしになっている。

そこには30歳前後の女性が1人、仰向けになって倒れていた。上半身が廊下に飛び出し、下半身はエレベーターの中に突っ込んでいる。どうやらエレベーターから出ようとしたところで黒い光を浴びてしまったらしい。

女性の傍には小さく膨らんだビニール袋が落ちている。中からパツク詰め牛肉や、野菜などがとび出していた。スーパーなどで買い物をしてきた帰りだったのだろう。

樹流都たちはその女性の前を通り過ぎ、廊下を進む。

3つ並んだ部屋の内、一番奥が伊佐木家だった。分厚くて重たそうな金属製の玄関ドアは閉じられている。

「じゃあ、僕はここで待ってる。ゆっくり休んでから荷物をまとめ
て」

樹流都が詩織の背中に声を掛ける。

「ここで待つの？」

「万が一ここが悪魔の襲撃を受けたら大変だからな。僕は見張りをやる」

「そつ」

詩織はレバーハンドル式のドアノブに手を掛ける。鍵はかかっておらず扉は簡単に開いた。

「じゃあアナタも上がって」

すると彼女は樹流都を家の中へと促す。

「え」

「アナタがずっと家の前に立っていると外の悪魔から見つかりやすくなってしまうでしょう？」

「そつかも知れないが。中には君の……」

樹流都は後に続く言葉を濁した。

この家の中には伊佐木一家の遺体があるかも知れない。自分が上がつて良いものか判断に迷った。

「大丈夫。中には誰もいないから」

「そうなのか？」

「ええ。父は会社にいるし、私、兄弟とかいないし。それに、あの人は……母親はそのエレベーターで倒れていたから」

詩織は淡々とそう告げる。

樹流都は先程倒れていた女性を振り返る。彼女が詩織の母親らしい。

先程詩織は彼女の前を通り過ぎた時に全くと言って良いほど何の反応も見せなかった。加えて女性は詩織の母親にしては余りにも若い。

そのため、樹流都は2人が母娘だとは想像もしなかった。

「そういうわけだから……アナタも入って」

詩織は最後にそう言い残し、さっさと家の中へ入る。ドアは自らの重みで閉まった。

樹流都は彼女の後にはついてゆかず、静かに身を翻すと一旦エレベーターの前まで戻った。

ポケットの中にハンカチがあるので取り出す。血で少々汚れてしまっているが、広げて詩織の母親の顔に被せておいた。

それから再び伊佐木家の前へ戻る。

彼は詩織の言葉に甘えて中に入れさせてもらおう事にした。

玄関をくぐり、静かに扉を閉める。

同時であった。奥から聞こえてきたドサツという鈍い音に驚く。何か重たい物が床に落下したみたいな音だ。

何事かと思い靴を履いたまま廊下にかかる。

取る物も取り敢えず一番奥の部屋に駆け込むと、そこはリビングだった。

詩織が床に横たわり、小さな吐息をゆっくりと律動的に繰り返している。

物音の正体は、彼女が倒れ込んだ時の衝撃だったようである。

樹流都は大事が起こっていなかったことに胸を撫で下ろす。

詩織の疲労は限界を超えていたに違いない。さすがにまだ意識は失っていないだろうが、彼女はもう寝ているも同然の状態であった。きつとこれから深い眠りに入るのだろう。

リビングは掃除が行き届いており清潔に保たれていた。

食卓用のテーブルと各家庭のリビングにありそうな一通りの家電は揃っているが、それ以外のものは全く置かれていない。一切の無駄が排除された機能美溢れる部屋だ。

そんな中、窓際で室内干しされている一枚の真っ白な掛布団が、唯一生活感を感じさせた。

壁には大きな窓が連なりそこから向かいのビルが見える。ベランダは無い。

樹流都はとりあえずカーテンを閉めておいた。外の悪魔から自分達の姿を目視されないようにするためである。

次に布団干しから掛け布団を取り寄せる。完全に乾いていたので詩織の体にそっとかけておいた。

その後すぐ、樹流都はリビングから出て玄関の手前まで引き返し、廊下で横になる。

未だ彼の体に疲労や眠気は一切無かった。これが本当に悪魔を吸収したことによる影響ならば、悪魔とは皆そっという体の造りになっているのかも知れない。

それは便利と言えば便利だが決して喜ぶべき事ではなかった。安らかな詩織の寝顔を見た後で、樹流都は実感する。

彼は、敵の襲撃に対応すべくそっと瞳を閉じて耳を済ませる。常に周囲の気配を感じ取ろうと神経を尖らせた。

ところがその数分後。樹流都もまた静かな寝息をかき始めてしまった。

眠気など確かに無かったはずなのだが、知らぬ内に無意識の世界へと旅立っていた。

図書館へ

……ん。

そ……ま君。

相馬君。

声がする。

余り減り張りの無い女性の声だ。

その声に呼び覚まされて、樹流徒はカツと^{まぶた}瞼を見開いた。上体を跳ね起こす。

寸刻、己の置かれた状況がはっきりしなかったが、すぐに自分が寝てしまっていたことに気が付いた。

体の上にはいつの間にか暖色の薄い毛布が1枚かかっている。

彼の正面には、呼び声の主・詩織が立っていた。

ニットの上にモッズコート、チュールスカートの下に黒いタイツ…

…彼女はいつの間にか私服に着替えていた。

右手にはきちんと折り畳まれた別の衣類、左手には350mlペットボトルを4本も抱えており今にもこぼれ落ちそうだ。

「起こしてごめんなさい。アナタが余りにも静かに横たわっていたから死んでいるように見えて」

「そう……。やっぱり僕は寝てたんだな」

樹流徒は自分自身に確認を取るみたいに呟く。

彼はこの事態を全く想定していなかった。睡眠を取ることが可能だということ、今はじめて知ったのである。

それによりとんだ失態を演じてしまったが、彼は、己の体に人間らしい機能が残されていた事にささやかな喜びを覚えた。

「まだ寝てて。アナタは悪魔と戦った疲れも残っているはずだから
「いや大丈夫。起きるよ」

樹流都は素早く立ち上がる。

睡眠前後で体の調子に殆ど変化は無かった。人間ならば誰しもが起床毎に経験しているあの頭がぼうつとなる感覚も襲ってこない。今まで絶えず起きていたかのようにであった。

ならば睡眠は無意味だったのか？と問われればそうとも限らない。何故ならば樹流徒は脳内が少しクリアになった感じがしていた。絶対ではない。あくまでそのような気がする程度である。それでも微かな心地良さを覚えた。

「僕は何時間くらい寝てた？」

「分からない。私はアナタがいつ寝たのか知らないから」

「言われてみればそうか」

「でも、私が起きてからそろそろ2時間くらい経つと思う」

「随分経ってるんだな」

樹流徒は率直な感想を口にする。それから

「本当なら悪魔の襲撃を警戒しなければいけなかったのに、済まない」

就眠してしまったことを詩織に詫びた。

「結果的には何事も無かったから気にしないで。むしろアナタも休

めて良かった」

「そう言ってもらえると助かる。毛布かけてくれたの君だね。ありがとう」

「ええ。アナタも」

「悪魔倶楽部へ行く準備はできてる？」

尋ねると、詩織は無言で相槌を打つ。

彼女は樹流都が寝ている間に全ての支度を済ませていた。

「相馬君。ちよつといい？」

「ん？」

「これ、もし良かった使って」

詩織は先程から手に抱えている衣類を樹流徒に手渡す。

黒い布地にゴールドのラインが入ったジャージの上下だった。汚れや染みも無く新品に近い状態だ。

「これは？」

「父の服」

「借りていいの？」

「ええ。アナタの制服もうボロボロなもの」

詩織は首を縦に振る。

「うちの父、私服はジャージしか持ってないからそれしかないの。

背丈は多分アナタと同じくらいだからサイズは合つと思うけれど」

「ああ。ありがたく着させてもらつよ」

「あと、これも」

続いて彼女は同じく先程から手に持っていた4本のペットボトルを1つずつ床に並べてゆく。未開封の白いキャップの下でミネラルウォーターが水面を揺らしていた。

「折角だけど、僕、喉が渴かないんだ」

「知ってる。でも念のために水分補給だけはしておいた方が良いと思う」

その言葉に樹流徒は1、2秒考えて

「確かに君の言う通りかもな」

ひとつ頷く。

眠たくも無いのに寝てしまったくらいだから、喉が渴いてもいなのに脱水症状を起こす可能性だってあるかも知れない。

「でも流石にペットボトル4本も要らないよ」

「残った水は浴室で体を洗うのに使ってもらおうと思って」

「ああ……そういうことか。助かるよ」

「タオルは洗面所にあるのを適当にどうぞ」

この辺りの建物は全て景観を重視しているため屋上に貯水槽があるマンションは無かった。そのため停電するとすぐに断水してしまう。地下の受水槽から各家庭に水を運ぶポンプが働かなくなってしまうためだ。蓄電池や自家発電装置を備えている建物ならば話は別だが詩織のマンションはそれに該当しなかった。

その後、樹流都は洗面所まで案内してもらおうと、隣の浴室で悪魔の返り血を洗い流し始めた。

青い血は水に溶け次々と彼の足下にこぼれ落ちてゆく。

水は冷たかった。普通の人間にとってそんなことは当然だが、樹流徒にとってはこれもささやかな喜びである。

全身さっぱりすると洗面所の鏡の前に立ち体を確認する。血は全て綺麗に落ちていた。

それから借りた服に着替える。

詩織父のジャージは、樹流徒の体には若干大きかった。

.....

伊佐木家の部屋があるマンションを出て徒歩で移動すること約30分。

2人は目的の場所に到着した。

ここは“龍城寺中央図書館”。樹流都の記憶では4、5年前に建てられた市営の公共図書館である。敷地面積約4600平方メートル。建物は2階建て。中が吹き抜け構造になっている。蔵書数は17万冊を超えCDやDVDだけでなくビデオテープも貸し出されている。個室が設置され一部の利用者達からは非常に有り難がられていた。またインターネットを利用するためのパソコンが配備されているが言うまでもなく現在使用不可能である。

2人はこれから予定通りこの図書館の窓を使って悪魔倶楽部へ移動する。

詩織の肩には少し大きめの旅行用バッグが提げられていた。中に何が入っているのかは不明であるが、樹流都が予想していたよりも大分身軽だった。

軽いのは荷物だけではない。詩織自身もまた足取り軽やかになっていた。良い休息が取れたに違いない。

図書館の前には階段がある。入り口まで続く、幅が広くて短い階段だ。市民の死体が複数横たわっていた。

2人はひとまず彼らの間を通り過ぎて図書館の中に入る。

入り口を通り過ぎると今度は彼らの視界が司書と図書館利用者たちの死体で埋め尽くされた。

今は受験シーズンを目前に控えた時期ということもあって学生の姿が特に目立つ。皆、机の上でうつ伏せになっており、まるで彼らが一斉に眠っているみたいであった。勿論床に倒れている人もいる。

「こつという光景に見慣れるのって、嫌ね」

「そうだな」

樹流都と詩織は一言交わし、お互い申し合わせることなく死体を外に運び始めた。

階段に倒れていた死体と図書館周辺に転がる死体も一緒に運ぶ。全て一箇所に整列させてゆく。

死体の数は全部で60前後ありそうだが樹流都の力ならば脇に大人を1体ずつ抱えることもできる。

30分もあれば作業を終える事が出来そうだった。

ところがその作業も順調に進んで樹流都が図書館内の死体の丁度20体目を運び出すために外へ出た時。

整列させておいた死体の傍らにいつの間にか異形の生物が1体、佇んでいた。

悪魔に違いない。

良い死体

その悪魔はげつ歯類の頭部と人間の体を持つていた。2足歩行をする赤茶色の巨大ネズミである。

体長150センチ前後。黒いマントを背負い右手には大きな鉞なた、左手には黄金に輝く三又蜀台を所持。

蜀台には3本の白い口ウソクが刺さっており、先端に黄緑色の不思議な火を灯していた。

悪魔は足下に置かれた死体を食い入るよう見つめている。その姿はさながら店内に陳列された商品を真剣に物色する買い物客であった。図書館の中から樹流都が姿を現すと背中越しに彼を見たが、すぐに視線を足下へと戻す。

樹流都は訝んだ。あの悪魔は一体何をしているのかと不審に思った。

脇に抱えている死体をその場に下ろし、悪魔の元へ駆けてゆく。

「そこで何をしている」
近付きながら声をかけた。

赤茶色のネズミは彼の呼びかけを無視する。それとも聞こえていないのだろうか。無言のまま右手に持つ鉞を天にかざした。

銀色の刃が妖しい輝きを放つ。次の刹那、それを躊躇い無く死体の腹に向かって振り下ろした。

勢い良く宙を滑り始めた凶刃。しかし、それはたった数センチ移動しただけで静止する。

樹流都が放った火炎弾が悪魔の鼻先をかすめていた。もし悪魔があと少しでも腕を振り下ろしていたら、今頃炎の塊はネズミ頭に直撃していただろう。

悪魔はそつと両腕を垂れる。背筋を伸ばして顔だけを樹流徒に向け「何するんだい？もうちょっとで私の頭が吹き飛ぶとこだったじゃないか」

と、砕けた言葉遣いで話しかけた。声色も陽気で、攻撃されたにも関わらず怒っている様子はない。

樹流都は悪魔の近くで立ち止まる。間髪入れずに問い詰めた。「お前は何者だ？」

赤茶ネズミは即答しない。先ずはその場で体を捻った。マントを翻し、片足のつま先立ちで華麗な3回転ターンを決め、見事体の真正面を樹流都に向けてピタリと止まった。それからようやく名を名乗る。

「私は“ビフロンス”。よろしく」

「ビフロンスは悪魔だな？今、手に持っている鉈で何をしようとした？」

樹流徒は更に追求する。

「見れば分かるだろ？ニンゲンの良い死体があったから解体しようとしたのさ」

悪魔は引き続き陽気な口調で返事をした。「これから散歩に出かけるのさ」とでも言うみたいく、軽いノリで恐ろしい事を口走る。

これには樹流都もどう反応したら良いか分からず内心で首を捻った。

眼前の赤茶ネズミが人間の死体を解体しようとする目的が分からないし、そもそも死体に良いも悪いもあるのかが不明である。

「何のために死体を解体するんだ？」

「そんなの、ロウソクの原材料集めに決まってるじゃない」

「材料だと？」

「ニンゲンの脂肪は良く燃えて良い香りを出すからね。ロウソクの原材料としては非常に優れてるんだ。特に肥え太ったヤツの脂肪は最高さ」

ビフロンスはそのように説明をして、また足下に目を向ける。

その視線の先に寝ている死体はこの季節少し肌寒そうなオーバーオールを着たとても大柄な成人男性。体重は3桁を超えていそうだった。ビフロンスに言わせると、彼はロウソクを作るための原材料として非常に良い死体らしい。

「そういうわけで私はこのニンゲンを解体しなきゃいけないから邪魔しないでよね」

「断る。悪魔にくれてやる死体は無い」

「別に君のモノでもないだろう？」

「……」

両者の間に見えない火花が散る。忽ちたちま険悪な空気が充満して互いの肌を突き刺した。

「あゝあ……あゝあ。黙って大人しく見てれば君も死なずに済んだのこね」

ビフロンスはそう漏らすと、長く尖った2本の前歯を剥き出しにしてシャアアと鳴いた。

様子を一变させ、獯猛な野生動物を彷彿とさせる迫力を身に纏う。眼の奥に殺気を滾らせ、鉞を振りかざし、問答無用で樹流都に襲い掛かった。

対する樹流都も氣迫で押されまいと後ろへは下がらない。むしろ敢えて前に飛び出した。

武器を使う悪魔とやり合うのはこれが初めてではない。バルバトスとの戦いを経験していたことがこの場面において精神的な部分で役立つた。

彼は目にも止まらぬ速さの前蹴りを繰り出し敵の腹に突き刺す。いきなり先制の一撃を奪った。

ビフロンスはうつと息を吐いて数歩後退。そのまま地に片膝を着いて苦しそうに俯く。

これを見て樹流都は直感的に好機を得たと踏んだ。追撃をかけるべく悪魔の爪を発動し敵に迫る。

しかし彼がビフロンスの攻撃範囲内に1歩踏み込んだ瞬間。

悪魔は素早く鉞を振り上げながら立ち上がる。ダメージを負っているかのような演技で樹流徒の油断を誘っていた。

それが首尾よく功を奏す。銀色の刃先が樹流徒の皮膚を裂いた。数本の前髪がはらりと舞い、彼の額に赤く短い線が浮かび上がる。

傷は浅かった。樹流徒が敵の騙し討ちに素早く反応し咄嗟に上体を仰け反っていたためである。後1歩遅かったら今頃どうなっていたか分からない。

ただ、これで危機が去ったわけではない。命の取り合いは次の瞬間にも続いているのだった。

ピフロンスは何を思ったか、いきなり左手に携えた黄金の三又蜀台を樹流都に向ける。果たしてその動きが何を意図するものなのか、樹流徒が彼あれこれ是と予想する間もなく、3本の口ウソクに揺らめく炎がそれぞれ膨張を始める。あっという間に火の玉となった。

ボウリング玉程度の大きさにまで膨らんだ火の玉は一斉に解き放たれる。1発が正面、残り2発は斜め前方へ。悪魔の手元から3方向に分裂した。そして火炎弾と同じかそれ以上の速度で宙を疾駆する。

正面に放たれた1発が樹流都の左腕に接触した。かする程度だったがジャージの袖は瞬時に焼失し大穴を開ける。遅れて腕にじわりと痛みが広がった。幸い小さな火傷程度で済んだものの仮に直撃を受けていたとしたらどうなっていたか分からない。火の玉は直進を続け数メートル先の空中で急速に萎み始め、勝手に消滅する。

「チチッ」

悪魔は笑い声とも舌打ちとも取れる鳴き声を発した。即座に鉦を構えて駆け出し、互いの距離を詰めてゆく。樹流徒に休む暇を与えない。

その頃、詩織は図書館2階から戦いの成り行きを見守っていた。彼女は悪魔と戦う術を持たず樹流都に加勢する事はできない。窓に掌を当て、寸秒齒がゆそうに眉根を寄せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5644x/>

悪魔倶楽部

2012年1月15日01時48分発行